

「ウマ」物語

——『部報』そして愛馬たち——

生 田 勝 一

・ はじめに

大学を卒業して札幌の新聞社に就職した昭和34年秋深く、信じられない「訃報」を耳にした。学生時代の愛馬（北標号）が厩舎の前で亡くなったと言うのだ。当時は札幌中央警察署の記者クラブに詰めていたが、取るものもとらずあえず大学まで車で駆けつけた。

厩舎はポプラ並木の傍、大学農場の飼料小屋の横にあった。中央署からタクシーで十分とからない。愛馬は厩舎に入ろうとして力尽きたらしく、胸から血を流して倒れていた。

獣医学部に通う馬術部員が教授とともに馬体を丁寧に診察、教授が「これはダメだ」とつぶやく。首に「とどめ」の注射をして安楽死させ、大学で解剖するため獣医教室へ運ぶという。わずかな時間をもらって、何があったのかを部員に尋ねた。

ウマは、サラブレッドとアラブの血が混じった「中半血種」。たてがみと尻尾が黒く、体全体も黒っぽい黒鹿毛の牝で、時に12歳。人間でいえば40歳ごろにあたる。大学馬術部の持ち馬の中で、国体や全日本大会で一番優れた成績を残していた。優秀な馬だから馬術部の幹部が毎年「お手馬」として調教し可愛がっていた。筆者（生田）が卒業後も、馬術部の主将を目指す部員がお手馬にしていたようだ。

その日、馬の気力を養うため全頭で騎乗して郊外へ遠乗りする「街乗」があり、大学構内を出て約4キロ離れた円山公園まで遠乗りしたという。小高い丘の上で昼食の時間になり、どの馬にも持参してきた飼い袋を首に下げてやり、昼飼いははじめた。そこへ馬たちの食べ散らすエサを目がけて山のカラスの群れが飛来した。驚いた馬たちが騒ぎ出す。そのうちの一头、繋留綱の結びが緩かったのが愛馬（北標号）が、飼い袋を首から振り落とし、結び綱を引きずったまま、狂ったように走りはじめた、と部員は話す。こうなっては手をつけられない。馬は丘を走り下り枯れた林の中を突きすすむ。途中で引きずった繋留綱につまずいたのか前のめりになった、枯枝が胸に刺さったのはその時だったらしい。馬は痛みをこらえてそのまま大学へ戻った——。

馬を診察した教授は「警戒心の強い馬がいくら疾走中とはいえ、林の枯枝に胸を突かれることはない。綱につまずいて前倒しになった強い力が働いていたとしか思えない」という。話を聞き終わった筆者は、そっと、たてがみと尾の毛を遺品に切り取り・・・手を合わせた。

§ (その一) ウマとの出会い

古い古い話、私が二歳か三歳の頃だったと思うが、北海道旭川市で冬に、雪の上でソリ遊びをしていて通りかかったウマの腹の下を滑り降り「怖いッ」と思った記憶がある。少し長じて四、五歳の頃、亡母と靖国神社参拝に出かけた折、東京の遊園地で「子馬に乗れ」と言われおびえたことがある。小さい頃からウマが好きだったわけではない。むしろ避けていた。

それが何時の頃からウマ好きになったのか、以前、私が別著「記録と記憶の自分史 第三部・学生期」に描いたことがあるので、その不思議な因縁のくだりを再録する。

「昭和 30 年 4 月 15 日だったかの北大入学式当日、真っ先に目を奪われたのはウマの姿だった。忘れもしないエルム（楡）の森の奥、農学部の建物の方角から六頭のウマに乗った騎手が、ひづめの音も軽やかに、縦一列になって通り過ぎて行った。啞然として見送った。馬術部の部員募集のデモンストレーションだと後でわかったが、そのカッコよさに引き付けられて、入学式どころの騒ぎでなかった。今でも式のことは何も覚えていない。

不思議なことが重なった。ボーとした頭で大学構内の外れにある『恵迪寮』へ向かうと、入寮許可者をアトラダムに私へ割り振った部屋は、「中寮 23 室」という部屋だった。入り口に『馬術部』と書いてある。寮は南寮・中寮・北寮・新寮の各二階建て四棟あり、全部で 63 室あるその中で偶然『馬術部』の部員のいる部屋を割り当てられたのだ。なんとなく啓示を感じた。部屋は体育系と文科系に大きく二分され、体育系にはサッカー・スキー・野球と色々あるのに、よりによって馬術部とは驚いたものだ。

『恵迪寮』は昔の「予科」、戦後の北大「教養部」の学生寮だから、一・二年生五人一部屋で、三年に進学すると「学部寮」に移る。部屋には二年に進級したばかりの先輩二人が残っていた。その一人がやがて主将になる樋口正明さんだった。「キミ馬術部にこないか」と誘われ一も二もなく同意。翌朝から、学業そっちのけで馬場へ通いだした。

『恵迪寮』エルムの森を抜けると、十分足らずで馬場（当時の北大馬術部ボプラ並木馬場）に着く。が、ウマと対面するのはその先、厩舎に行ってから。六頭のウマが馬房から長い首を伸ばしていた。前日、部員募集のデモンストレーションで見たウマたちだった。

ボヤボヤしているとパドックから声がかかった。あとでわかったのだが、前年主将になった三年先輩の大久保利彦さん（S31 卒）だった。主将とはいえ前夜から二人一組の宿直当番をこなし、朝早く起きて「ボロ出し」と称する汚れワラをパドックに広げて馬房を清掃する。ウマの世話に主将も新人もないことをすぐ理解した。

その年馬術部に入部した新人は七、八名だったか。先輩に教えられてウマを馬房から出し、水を飲ませ、ひづめをきれいにしてお体をブラシでこすってやり、寝ワラや汚物を落としてからハミをつけ、鞍を置く。と書くと簡単そうだが、馬房から曳き出すまでが大変。「頭絡」と称する綱の網を頭にかぶせ曳き綱を引くのだが、「頭絡」をかぶせるとき、ウマによってはクルリと後ろに向きになって意地悪をする。

ウマは利口で、人間が近づいただけでその人がどの程度ウマを理解しているか分かってしまう。だから、「新人」などは一発でウマに見抜かれてしまう。

ひづめをきれいにするのも大変だ。馬体の左側に左肩を寄せて後ろ向きに立ち、肩を少し押してやる感じでウマの左前足を持ち上げる。慣れれば何でもないことだが、初めはウマがいうことをきかない。左前足のつぎは左後足。これも慣れれば後足のひづめに手をかけるだけで勝手にウマがひづめを裏返しにも

するが、そこまでくるのには一週間以上かかる。

馬場に出てからがまたしんどい。最初は部班運動といって馬場の中央に横一線に並び、馬体の左側に手綱をもって整列する。このときすでにウマは乗り手を見抜いているのだ。「騎乗」の号令でどうにか馬の上にまたがっても、ウマはそ知らぬテイ。「前へ進め」の号令がかかっても動こうともしない。先輩は「馬の腹を蹴れ」というものの、打てども押せどもまさに馬耳東風。そのうちに一年そこそこの先輩が舌打ちしながら「オレに貸してみろ」といって近づいてくると、ウマはたちまち緊張して、乗り手が替わると同時にスタスタ歩き出す。「ホラ、歩くじゃないか」。その一言がいかに悔しかったか、何人も経験済みのはずだ。

ウマの背にまたがってみるとずいぶん高い感じがする。ウマの背（馬高という）まで1メートル20センチぐらい、その上に自分の座高が加わるから3メートル近い所から見下ろすことになる。高く感ずるはずだ。最初のうちはウマにまたがって馬場を一周するだけで精一杯。汗だくだった。

新人がヨタヨタと乗りつづけたあと、先輩が乗ってウマの調教をし直す。ヘンな癖をつけたからそれを元に戻すためだ。障害飛越もやってみせる。これには驚く。

二時間の朝の練習が終わると、六頭を厩舎の前に戻し、くつわ・手綱と鞍を外して騎乗後の手入れを丹念に行う。きれいなタオルでウマの顔を拭き、尻を拭き、ひづめを洗う。馬体をワラやブラシでこすり、汗をぬぐう。騎乗後の手入れに三十分はかかる。このあと水を飲ませ馬房に入れ、朝飼となる。馬房は当番が清掃し新しい寝ワラを敷いておくので、ウマたちは気持ちよさそうに飼料を口にする。切りワラにエンバク（燕麦）とフスマを混ぜ塩とカルシウムを加える。これが朝食だ。昼には昼飼いを与え、午後の練習が済むと夕飼い、夜は宿直の当番が夜食に、乾燥牧草か、夏だと青草を与えたりする。一日四食となる。

朝の練習と厩舎作業を終えてから学校に行くとなると、「第一講目」に間に合わないこともある。それが英語やドイツ語の時間となると授業の前には必ず出欠がとられ、これは「代返」がきかないから、厩舎からそのまま教室に駆けつけるハメになる。最初のうちはよく「くさい」と嫌われたものだ。着衣についての匂いは、自分では気づかなくても匂うものらしい。

◎トノイ（宿直）の夜の出来事

一週間ぐらいで宿直当番が回ってきた。午後の練習が終わってウマの手入れを済ませ、厩舎に入れて夕飼いを食べさせたあと、部員は引き上げる。それからが宿直当番の役目だ。

夜中の十時か十一時ごろ、バケツに入れた水を一頭ずつ飲ませたあと、デントコーンと乾燥牧草を馬房に入れて夜食を与え、異常がないかどうかを確認して部室の二段ベッドで寝につく。部室は厩舎と離れていて、サイロの横の農場厩舎の一面にあった。

何度目かの宿直当番で、たまたま一人で夜の作業をしているとき、乾燥牧草が足りなくなったので天井裏の牧草置き場に上がり、作業用のフォークで牧草を下階におろしていたところ突然、牧草の中から「ワアーッ」という声があがり、男が一人飛び出して天井裏から地面に飛び降りた。これには驚いた。今でいうフーテンのような男が、暖かそうな牧草置き場に忍び込み、高いびきのところを見つけた、というわけだ。別に見つけたわけではなかったが、どうやら大学構内の空き巣常習者だったらしく、男が捕まったあと、農場の人達から感謝された。盗む物は何もないのだが、乾燥牧草の中でタバコでも吸われたら一大事だった。

この事を当時の「部報」に書いたのが少し気取ってタイトルにした「トノイの夜の出来事」だ。先輩の宿直の相手役が、何かの都合でその作業場に居合わせなかったことがあり、サボったことを内緒にしてその先輩に後で感謝もされた。

◎「百鞍一人前」

その頃部室の壁に、「乗鞍数」の表なるものが張り出されるようになった。馬は「百鞍一人前」といって 100 回騎乗しなければ一人前とは言えない、とされた。何とか早く 100 鞍に到達するため、午前か午後、講義のない時間を見計らって、札幌競馬場で鞍数を稼ぐことにした。競馬場へは馬場から農場を突っ切って行く近道があった。境界の小川を渡ると十分とかからない。競馬場には乗用馬が数頭いて「運動不足だからいつでも乗ってくれ」という。喜んで乗せてもらった。一日に二頭乗ったことも。朝と午後、馬術部正規の練習と合わせて一日三鞍から四鞍稼いだ。夏休み明けまでには 100 鞍に達していた——。」ウマはますます可愛くなる。

§ (その二) 六頭のウマ

昭和 29 年に北海道で国民体育大会、「国体」が開かれた。馬術競技は札幌競馬場で開催と決まり、中障害飛越を「貸与馬」、その頃は「自馬」競技ではなく主催者の用意した貸与馬で成績を競うことになった。このため二十数頭が購入された。いずれも競走馬あがりであった。

国体が終わり、使用馬の処分が図られることになった。これに目を付けたのが、当時まだ「自馬」を持たない北大馬術部。主将の大久保利彦氏（故人）らが馬術部長の農学部松本久喜教授に懇請して、なんとか六頭分の購入資金をつくる。この先は「馬術部三十年史」から。

「私（大久保）も国体役員の一人として種々の会議に出席致しました。また松本教授も会議に必ずご出席ください、非常に自馬の購入に力をお入れ下さいました。大学当局にも再三再四お話をされ 30 数万円の予算をいただいて来られ（今なら 300 万円以上）、これで夢に見た自馬購入資金が出来たわけです。この頃ちょうど、学長の選挙があり、杉野目教授が学長になりましたので、早速学長を「北大馬術同好会」にご入会をいただきました。この点多少の政治臭があったかと思われませんが、いずれにしても資金が得られた事で先輩・現役共々歓喜した事は事実でした」

ところが自馬六頭を購入しても、そのウマを入れる厩舎も飼料もない。また松本教授に泣きついて農場の一部の厩舎を無料で借り、飼料も当分は農場のものを使うことになる。松本教授といえば馬術部の先輩。当時、農場長を兼務していたのが幸いした。そこへ私たち昭和 30 年入学の部員が入ってきた。馬術部としてピッカピカの「自馬」と借り受けたばかりの厩舎、パドック、それに部室が揃った。なんとウンのいい時期の馬術部入部となったことか。

ここで六頭のウマを紹介しておく。

(1) 北 標 号 (ミストクシマ)

最初は筆者（生田）がお手馬にしていた「北 標（ほくびょう）号」。冒頭の「はじめに」でも記したように、筆者が卒業した昭和 34 年秋、不慮の事故で死んだ。12 歳の働き盛りであった。元の名を「ミストクシマ」という。徳島県の競馬場で走っていたのかも知れない。

馬歴は昭和 20 年 4 月、北海道浦河町生まれ、父・ローライト（アングロノルマン系）、母・北進（サブラッド雑）の中半血種、鹿毛の牝。ウマはこのような半分雑種でも、当時の競走馬になると血統が登録されている（騎乗馬も同じ）。ちなみにアングロノルマン系は略して「アノ系」と表記される。「鹿毛」はシカの毛のように茶褐色で、足の下部とたてがみ・尾の黒いものをいうが、前にも記したようにこのウマは全身が黒っぽい毛色で見るとからに剽悍な印象を受ける。

北大で馬名を変えたのは入厩して二年目で、「慥」の字は「すばやい」「気性がきつい」の意味があるから、よくぞこの字を選んだものと感心している。

北大で付けた馬名にそぐわず、馬場に出るとロデオまがいの跳躍をみせ、慣れない者が背に乗ると振り落とそうとする。大学の夏休みに遠征に来る関東の馬術部員で、振り落とされなかったのは青山学院大の主将ただ一人であった。このウマで筆者は、昭和 33 年秋の富山国体大障害競技で「四位」に入るが、このことは別に記す。

(2) 北 潭 号 (シラカワ)

馬歴は、昭和 17 年 5 月、北海道石狩町（現石狩市）生まれ、中半血・牝・鹿毛。額のまん中に白毛の星のある「流星」で、左後肢の白い「左後一白」。父・昭山（アノ系）、母・第二白川（同）。北大に入厩した時、すでに 17 歳で、いささか老けていた。体高は 1 尺 55 寸くらい、六頭の中では一番背が高く、おとなしく、見るからに上品な感じだった。おとなしいうえに障害物も厭わず飛越するから、新人や女性向きであった。

あるとき、このウマに女性部員を乗せて低い障害を飛ばせていた際、鞍の上で乗り手がぐらつき落馬して腰を打った。これにはあわてた。打ち所が悪く一か月ほど入院した。筆者自身、何度も落馬しているが、人間には「受け身」の本能があるからめったにケガはしない。ケガをした女性はいささか運動神経がにぶかったのかも知れない。それでも退院後しばらくしてまた馬場に通うようになった。やはり、ウマの魅力には勝てなかったようだ。

このウマは昔、軍隊で使う「軍鞍」のような固い鞍を使って、背骨を傷めたことがある。その傷が悪化して手術を受けたが、そのとき神経まで切られ、首を下向きに巻き込むのが苦手になった。休んでいる時はいつも、首を水平より少し上方に伸ばしているので、かえってノーブルに見え、ポプラ並木などでしばしば観光客のカメラのモデルになった。筆者（生田）もこのウマにはお世話になり、昭和 32 年 11 月の全日本大会中障害競技で「5 位」に入賞している。

(3) 北 楡 号 (ミス・アップデール)

旧馬名でもわかるように、ピンと尾を上げた気品のある勝気な姿。筆者が主将を務めていた時（昭和 33 年）のサブキャップ千葉幹夫氏（S34 卒）が、昭和 33 年 10 月の富山国体「総合馬術」競技で優勝。続く京都での全日本大会「総合馬術」で三位。同「中障害」競技で二位の輝かしい成績を挙げた。千葉氏はこの成績で東京オリンピックの候補選手となり、卒業後、中央競馬会に入って東京、つづくメキシコ両五輪に日本代表として出場した。すべて、このウマのお蔭である。

馬歴は、昭和 21 年、浦河町生まれ、「アノ系」の牝で栗毛、後肢が両方とも白い「後二白」、父・勇進、母・小岩井はともにアラブ種系の「アラ雑」で、やはりアラブ種の血が混じっていた。ちなみに栗毛とは、たてがみと尾が赤褐色で、地色は黒味を帯びた茶色。夏毛のときブラシで磨き上げると、全身、輝くばか

りのクリ色になった。

ただ、このウマには悪いクセがあった。ウマの癖にはカム（咬癖）、ケル（蹴癖）、肩を揺らす（熊癖（ゆへき））の三種あるが、このウマはその三つとも身につけていた。彼女の馬房のまえでボーッとしているといきなり咬みつかれる。部員の誰もが彼女のキスマークをもらい、筆者も新人の頃その洗礼を受けた。洗礼などという生易しいものではなく咬まれて肩甲骨がずれるほどだった。しかも馬房に入りロープのくつわを嵌めようとする、クルリ後ろ向きになって蹴る。エサの時間が少しでも遅くなると肩を左右に揺らす「熊癖」を始める。始末におえない。夏にポプラ並木見物の観光客が、つれの女性にいい所を見せようと草をちぎって近づいた時、いきなりがぶりとやられて背広を破られたこともある。

(4) 北斗号 (旧・金花)

筆者（生田）が入部したとき、最高齢馬の一頭だった。馬場の中で、決められた高度な馬場運動を正確に行うよう調教されたウマで、新人が乗ると調教を崩すと言われ、めったに乗せてもらえなかった。

馬歴は、昭和 17 年 6 月、日高の静内町生まれ。中半血の去勢馬（騙という）で淡い鹿毛。父・森金（中半血）、母・第二ジュラス（アノ系）。比較的小柄で、アラブ種のように見える。利口なウマで、障害飛越ではよく直前で拒止したり逃避したりして乗り手を降り落とす。

昭和 31 年までは全国大会にも出て、全日本大会（川崎）「中障害」競技で四位、関東馬術大会「複合」競技で五位に入賞したこともある。

(5) 北翠号 (エリザベス)

元の馬名にふさわしく美しいウマだった。昭和 23 年、日高の豊平町生まれ、血統は父・母ともに不詳で、だからウマ自身「種類不詳」。牝の栗毛で、額にきれいな「流星」があり、四肢ともに白い「四白」。馬体があまりにもきれいだったので、血統にはこだわらず購入したらしい。常に一番張り切っているの、北大では「翠」の字を充てた。ただ神経が細やかで、一番の恐がりやであった。一寸した事にすぐ驚き、首を高く上げ、鼻孔をふくらませ、目をおどおどさせ、さも恐ろしげに恐怖の感情を表現する。

自馬となった六頭のウマの中では、一番調教の遅れたウマとみられ、調教するにも口（ハミ受け）がかたく、誘導しにくいウマであった。それでいて障害飛越は上手で、誘導さえうまくやれば 1 分 30 ぐらいの障害はラクに飛び越した。

障害飛越の調教は、一度拒止、または逃避されるとそれでおしまい。また最初からやり直さなければならない。要は乗り手との信頼関係で、結局のところこのウマは障害物が恐ろしいのだから、乗り手はウマを安心させ、信頼させて誘導しなければならないわけだ。

(6) 北嶺号 (ヨシタカ)

このウマほど数々の大会で優秀な成績を挙げたウマはいない。馬体はどうみてもカッコいいとはいえない。人間で言えば胴長の短足。首と胴が長く背が低く一見駄馬の感があるが、それでいて後躯のバネは強く、助走なしでも高い障害を飛び越すことが出来た。願ってもない体躯だ。

馬歴は、昭和 19 年 5 月、広尾郡大樹町生まれ、中半血の牝、栗毛。額の「流星」と四肢の「右前後半白」の特徴がある。父・オンブラージュ（アノ系）、母・白梅（中半血）。競走馬として、両親とともによい成績を残したようだ。ここに目を付けたのが、六頭のウマを購入した時の大久保主将。このあとは「馬

術部三十年史」による。

（前略）「学校当局にお叱りを受けることは十分承知で、道営札幌競馬に自馬を出して資金を稼いだ。ミストクシマとヨシタカの二頭で、部員はウマの手綱を持って一回 200 円、ウマが賞金を得たときはその一割。ウマには出走しただけで 6,000 円の手当てと賞金が入る。」このお金で、馬術部の運営と本州遠征の費用がいかに助かったことか。

筆者（生田）が二年のとき、道営競馬にヨシタカが出走して勝利、馬丁（ばてい）アルバイトの 200 円に加えて優勝賞金の一割、「1,000 円」を手にしたことがある。もちろんウマには出走手当と賞金が、ガバッと入っていた。

（7）その他のウマたち

六頭のほかに筆者が大学三年のとき北大日高実験牧場から「林城」というウマをもらい受け、のちに

- ・ **北 春 号** と名付けた。旧馬名の「林」という字は、このウマが日高牧場で生まれた年の宮中歌会始めの勅題で、その年に生まれたウマにすべて「林」の字をつけたという。おめでたい名前の割にはピリッとしたところがなく、ひよろひよろ「コンニャク」とあだ名する者もいた。それでも何とか1^ねぐらいの障害を飛ばすところまで育て、その後は「北斗号」より大きくなったという。ちなみに血統というと中半血の牝、鹿毛で、父・ホシトロ（中半血）、母・七三六（同）と妙な名前だが、いかにも実験牧場で育てた母ウマらしい名だ。

- ・ **北 涼 号** 筆者が卒業した後に新馬が入った。34 年秋に死んだ「北標号」の代馬としてかつての馬術部員が寄贈したもので、馬歴は昭和 27 年 4 月、十勝の河東郡生まれ、旧名を「第二グレース」といった。中半血の牝、栗毛で、額に丸い「星」がある。父・マンカツ（中半血）、母・朗高（アノ系）。北大にもこれほど若いウマが入るようになった。35 年 2 月に入厩したとき腹に仔が入っていて、4 月下旬にメンコイ仔馬を生んだ。8 月に離乳させ、11 月中旬に、母ウマの贈り主のもとに仔を返したという。

- ・ **朝 清 号** 北大には以前から名物馬がいた。「北」の字が付かない別格馬で「朝清号」という。北大日高牧場生まれだが生年は不詳、重軌馬ブルトンの血が入っているとの中半血種で去勢馬「騙」、栗毛、額に「流星」をもつ。父・芳嶺（中半血）、母・七三六（同）と登録されているから母方は名無しの実験馬らしい。重軌馬種の血が入っているとされるだけに馬体は大きく重く、どう見ても乗用馬には見えない。本来、農耕馬または馬車馬として使役するはずが、初期に農場側で馬車馬としての調教に失敗、猛烈に暴れて馬車をかけさせないので使い道がなくなり、馬術部に飼育管理をまかされた。馬車を嫌って暴れるということは「頭の良さ」でもあった。馬場で騎乗してみると、ドタドタ歩きながら乗り手の指示で動くし、1^ねの障害物もなんなく跳び越す。誘導によっては1^ね40^{センチ}の高さも飛越した。対外競技に貸与馬として出場させ「難馬中の難馬だ」と注釈して、このウマの乗りこなし方によって勝敗が決まったものだ。頭がいいから繋留綱を解いてなんなく放牧し、飼い付け時になってきちんと自分の馬房に戻るなど、いくつものエピソードを持つ。部員で愛着を抱いた者は数知れない。

- ・ **幸 運 号** 農場管理のウマでもう一頭「幸運号」がいた。血統も何も残っていないが「重半血種」であることは間違いない。これも馬車馬としての調教に失敗したらしくそれだけに頭がいい。農場から馬術部が「勝手に使え」といわれて馬場に出し、乗ってみるとなかなかいける。障害物も高さ1^ねぐらいならなんなく飛べた。こうしてウマの「あたまかず」を増やしたものだ。

§ (その三) ウマの血統と能力

昔々その昔、アラブにウマ好きの王がいた。能力の優れたウマを選び出そうと、ある時アラブのウマすべてを集め、砂漠で一斉に走るよう号令した。ウマたちは何日も走り続けた。何日か経ってウマたちの走る先にオアシスが見えた。ノドがからからのウマたちが走り寄る。あと何メートルかで水際に着くその時、王から「止まれッ」の号令。ノドが渇いて死にそうなウマは聞く耳をもたない。一斉にオアシスに飛び込む。と、その時、3頭のウマが水際にピタリと停まった――。

この3頭のウマをイギリスに運び、繁殖馬にしたのが**サラブレッドの始祖**だという。「ゴドルフィンアラビアン」「ダーレーアラビアン」「バイアリーターク」などという馬名が残っていて、延々千年以上にわたる血統が今に続く。イギリスで生まれた伝説だろうが、三頭を始祖とする血統図は現に残っている。アラブの血が50%、ということは父母のどちらかがアラブ種なら「**アングロ・アラブ**」、あるいは「**アングロ・ノルマン**」と称して、そのあとも血統図は続く。25%以下になると「**中半血種**」となるが、それでも血統図は続く。どのウマも血統を持つから、人間よりよほど由緒正しい。

◎ウマの性質

馬術部に入部して間もなく、教科書としてウイルヘルム・ミュゼラーの「**乗馬教本**」を読まされた。その教科書の「馬の心理」に次のようにある。

「馬は温順で親しみ深く、人が普通想像する以上に鋭敏である。愛撫に対し甚だ敏感で非常に記憶がよいと共に、特別に鋭い土地感覚を持つ。環境にすぐ順応し、一度得た習慣は中々これを除き得ない。物に怖じ、粗暴な取り扱いや懲戒を受けると忽ち不安を感じる」

これまで記してきたウマのエピソードがすべてあてはまる。「はじめに」で記した北標号の狂奔、胸に枝を刺したままの街なかの帰厩――。馬場に出てロデオを演じたのも不安の頭れだったかも知れない。ウマたちの「癖」が治らないのも然り。

ウマは何故走るか、なぜ競走するか。臆病な「逃げ」の生き物だからだ。敵に襲われないようだれよりも一番に、早く遠くへ逃げたい、その本能がスピードを速め距離をのばす。

不幸な死を遂げた北標号は、馬場でどんなにロデオを演じていようと、お手馬にして可愛がっていた筆者(生田)が乗ると、ピタリとおとなしくなった。それがまた可愛い。愛情を受けたことを体で覚え、忘れようとしなない。

◎エビハラのこと

「北大馬術部三十年史」に、自馬購入後の資金作りのために当時の大久保主将がヨシタカ(北嶺号)とミストクシマ(北標号)を道営競馬に出場させたことを記している。大久保主将は「小生などは獣医学部に所属していましたので、若し馬に事故が起きたら責任を持つ、治療は学部の教授にお願いすることにしていたところ、ミストクシマ号が事故ではなくエビハラになり、約一か月騎乗できなかった事が有りました」とサラっと書いている。

エビハラというのは足の腱鞘炎、専門用語では「**腱肥厚**」といい、冷湿布するかマッサージするしかない。ミストクシマを愛馬にしてから、時々、右前肢を引きずるようになるのでおかしいと思っていたら、このエビハラであった。無理をしないで乗っていればどうということはないが、困ったのはこのウマで

富山国体に出場することだった。直前になって足（人間ならスネ）が腫れ、エビハラだとわかったのだ。

懸命にマッサージを続けた。騎乗の前後、ワラでこすり布でこすり、30分ずつ続けた。その間ウマは心なしか気持ちよさそうに佇んでいる。貨車輸送の際はどうか。当時は馬運車は使わないから、自分でウマもろとも貨車に乗り込んでマッサージを続けるしかない。次の項はその貨車輸送の珍道中を記す。

◎国体出場

その年、昭和33年の国体は、10月、富山県で開かれた。札幌・桑園の操車場から富山県の目的地の貨物駅まで一週間近くかかる。この後は筆者の「自分史第三部・学生期」から引く。

「自馬の長距離輸送なので、富山での国体のあと名古屋・中京競馬場での全日本大会にも出場することになり、北大と札幌競馬場乗馬クラブのウマ計7頭を連れて行くことにした。貨車の中でも一番大きい「ワム」型は、本来3頭ずつ向き合わせて計6頭しか積めないのだが、無理して3頭と4頭を向き合わせての計7頭を運ぶことにした。この無理な積み込みが後々事件を生むことなど、考えもしなかった（中略）。貨車は桑園貨物駅から出る。貨車の片側3頭のところに馬具などを納めた大きな鞍箱を積む。真ん中が広く空いているから、そこへ乾燥牧草をうず高く積み上げ、エンバク・フスマ・塩などの栄養飼料を入れると人の乗るスペースは牧草と天井との隙間だけとなる。実に心細く、危うい感じだった。（後略）」。

しかも朝夕、トクシマの腹の下に潜り込んでエビハラの足をマッサージしなければならない。あとで考えて、よくぞ出来たものと感心せざるを得ない。

この道中では、水汲みの途中で貨物列車の発車に遅れそうになったり、信越線の清水トンネルの手前では、実際に筆者（生田）ら介添人が一駅、乗り遅れたりした。そのころ貨物列車は、決まったダイヤが無いに等しかったから、こんな珍道中も起こり得た。

◎信じられない飛越

こうした苦労の末、会期の2日前に富山に着く。7頭のウマに異常がなかったのが何よりだった。ただ、開会式には参加できなかった。その日、東京・市ヶ谷の法政大学で就職試験があり、夜行列車で富山―東京を往復して、新聞記者の職を確保している。そして富山に戻った翌日が大障害競技の出場日だった。まるで綱渡りのような日程だった。出場馬のミストクシマ（当時の北大馬名）には、調整程度の軽い練習しか施していない。障害コースの最後には、幅3メートルの水濠と高さ1メートル60の三段横木が控えている。過去に経験したことのない障害物であった。スタートラインを出てからは、ほとんど夢中だった。中間まで減点ゼロの無過失通過。少し気を抜いたのが愛馬に伝わったのか、高さ1メートルの何でもない単一横木に後足を引っ掛け落下、減点「3」を喫する。そして最後の水濠と三段横木。全部愛馬に任せきった気で宙に飛んだ。完全な飛越であった。滞空時間がずいぶん長く感じられた。ゴールしたあと、計測の時計を見ると制限時間をかなりオーバーし、「減点29」、「4位」であった。

◎愛情と信頼と

出発前にはろくな練習もせず、長い貨車輸送を経ていきなりといってもいい未経験の難しい障害を飛越出来たのは何故か。貨車の中でも会場に着いてからもマッサージを怠らず、体力を蓄えて試合に臨んだからではないか。大障害の最後を完全飛越したのは、ウマに任せた気持ちが通じたからではなかったか。結果的に、3位までに入って表彰台に立つことは出来なかったが、それも何でもない横木を落下した

ためで、気を抜いた一瞬がウマに乗り移ったに過ぎない。その一瞬、わずか3点の差が命取りになる。富山国体はいろんなことを教えられた。

もっとも愛情と信頼だけではウマの能力を引き出せない。乗り手に基本的な教育が必要となる。先に上げた「乗馬教本」ではそれを「姿勢」「感覚」及び「作用」または「扶助」だとする。次項から教科書にいう「騎手の教育」について記す。

◎騎手の教育

教科書はまず「正しい騎乗姿勢」から始まる。この章の後半に「乗馬教本」から引いた様々な図を載せたが、（注：本稿では紙面の都合で省略）忠実に真似ようとする中々難しい。そこで筆者（生田）自身が体得した騎乗方法を交えてみる。

「騎手が習うべき第一のことは『平衡』を保つことである」という。これがまた難しい。筆者らは「三点騎乗」という表現で学んだ。「両坐骨」と「股の縫際」の、普通人で一辺10センチほどの正三角形の上にまたがる。鞍を置くと分かりにくいから裸ウマにまたがるといい。裸ウマだと馬の背骨がジカに触れるから、三つの支点が分かりやすい。右の坐骨に支点をかけるとウマは右に曲がるし、左坐骨に支点がかかると左に曲がる。決して手綱を引いて曲げるのではない。手綱を引くと首だけ曲がる。

「腰を張る」という。これも言うほどに易しくはない。それでいて重要な基本動作だ。「乗馬教本」ではこれを、ぶらんこや、平らな床の上で尻をもち上げる図で分かり易く描く。腰の張りを会得しなければ、ウマに「推進」を与えることが出来ないし、ウマを止めることもできない。「腰を張ってウマを止める」その技術を会得するには練習しかない。

一番難しいのは「脚」の使い方だ。「乗馬教本」では、「腹帯の直後に与えられる時の『歩度の増加』」「腹帯の後およそ一拳幅の処に与えられる時の『側方運動』またはその停止、制限か抑止」と記す。読んでだけで分かるものではない。要は両足でウマの腹を締めることなのだが、力いっぱい締めたところでウマに勝てるわけがない。締めるといってもウマに対する一種の合図で、「前へ進め」と合図したり「もっと速く」「歩度を伸ばせ」と合図したりする。腹帯の一拳幅後ろに合図すると「側方に寄れ」の合図になったり、その抑制になったりする。これも練習を重ねて覚えるしかない。かかとに付ける拍車は、脚の補助をなす。

「鐙革」の長さ、かかとを下げて乗る「鐙の踏み方」、「膝の位置」、斜め前方に向ける「足先」なども、「乗馬教本」を読んだだけでは理解できないからウマに乗ってみるしかない。

「乗馬教本」ではこのあと「体重の作用」として、「前傾姿勢」や競馬のジョッキー乗りなどが図示されている。前傾姿勢は障害飛越で覚えなければならないが、半分は本能で身につく。

◎ウマの調教

札幌競馬場の乗馬兼使役馬に「レンザン」という青毛の牡ウマがいた。旧陸軍の「連山戦闘機」が飛んだとき、記念に付けた馬名だった。「青毛」とは青みを帯びたツヤのある黒毛のウマをいう。旧陸軍最後の国産戦闘機の名にふさわしく、威勢のいいウマだった。重半血種の牡、去勢に失敗した「カタキン」だったが繁殖能力はあった。

競馬場の厩舎にもう一頭、「セントエイジ」という美しい栗毛のアングロ・アラブ種の牝馬がいた。彼女が知らぬ間に身ごもった。どうやら「レンザン」の仕業らしい。カタキンのこのウマは馬房の入り口に

差し渡す「馬柵棒（ませんぼう）」を簡単に外して浮気をする。「セントエイジ」の馬柵棒も外して夜這いしたとみえる。

やがて「セントエイジ」の仔が生まれる。「セントベル」と名付けた。父親の血統を引いた青毛に育った。一年で乳離れし、筆者（生田）の「隣部屋（?）」に引っ越してきた。実はその頃、競馬場の厩舎の端にある通称「厩務員小屋」に寝泊まりして、毎朝、ウマに乗っていた。大学を出て地元の新聞社に就職した年であったが、給料が安いという酒を飲むものだから、下宿料も払えなかった事情がある。

ある夜、隣のウマ小屋から板壁越しに、ペッタンペッタン妙な音が聞こえてくる。そっと起き出して隣を覗いて見ると、なんとセントベルが長い物をおなかに打ち付けて、マスターベーションの最中であった。ウマのマスは初めて見た。考えてみれば不思議はない。年相応の健康体といえる。「タヌキの腹鼓」というのも、案外、これかも知れない。

このことを競馬場に告げると、「そうか、ベルも明け二歳、そろそろ調教か」と、妙なところへ話が進んだ。そしてその「調教」の役目が筆者に回って来た。

◎ウマの初乗り

仔馬の調教で、初乗りは何より大切だという。失敗すれば終生ヘンな癖がつく。

最初は背中に静かに毛布をかけ、歩かせ、しばらく輪を描く運動をする。次に、これも静かにクラを置き、腹帯を締め、輪を描く。途中から鐙をわざと垂らして腹に当たるようにして、慣らしていく。ベルはもう汗びっしょり。ここで休ませてはいけない。かなり疲れた頃合いを見計らってクラにまたがる。ベルは振り落そうとして跳ねる。まだまだ元気。ここで振り落とされてはすべてがパー。おおげさに言う。「死んでも落とされない」これを一日やり通す。実際には二、三時間だが、ウマの能力はこの時に決まる。

初乗り調教が成功して、セントベルはその後、日高の鎌田牧場に引き取られた。この牧場は馬術部出身の鎌田さん（旧姓榊原さん）が経営していたもので、鎌田先輩はベルをしっかり調教して国体や全国大会に出場させた。（編集注：S38(1963)年山口県での全日本馬術大会・障害Aクラス（大障害相当）では鎌田さんがこのセントベルで優勝、日本一にも輝いた。後に東京五輪候補馬の指定にも。）

先の「乗馬教本」は「調教」の項の最後のまとめに、このように記している。

「調教が正しく行われているか誤っているかを判断するところに、むつかしさがある。ここにおいてもかの命題があてはまる。『汝等 その果実によって その樹を知るべし』（マタイ伝 第七章）」

§ （その四） さらば ポプラ並木

◎先輩たちの教え

昭和34年に北大を卒業し、その秋、愛馬を失ってからというもの、翌年からウマに乗る機会が少なくなり、転勤も重なってウマとは次第に縁遠くなった。だからウマ「物語」を書くにしても、馬術部のその後の「部報」をひも解かなければ空白は埋められなかった。そして、現役時代には耳にすることもなかった先輩たちの貴重な一言に、はからずも出会うことになったのである。

昭和58年の「部報」第29号に岡田光夫監督の提言、「何故馬を動かそうとしないのか」がある。これを読んで「これだッ」と思った。卒業してから「部報」に目を通して、七面倒くさい技術論に走るきらいがあるのでいささか辟易していたところへ、この岡田提言である。岡田さんは昭和17年卒業の大先

輩。インターハイで全国優勝している。札幌市の土木部長を務め、退職後、無理に請われて馬術部の監督に就任している。その岡田先輩が言う。

「(前略) 今の練習を見ているといろいろのタイプの乗り方がある。何も考えずに漫然と馬に乗り、『巻乗り』の号令で馬が正確な円を踏もうが踏むまいがお構いなしという放漫型。この中にはただ駈足で馬場を無意味に走っていたり、障害をいくつもいくつも馬があきる程飛んでいる者もいる。このように考えることなしに馬に乗っていたのでは第一馬がよくなならないし騎手も上達しない。(略) 普段の生活をしながらでも頭の中にいろいろな場面を思い浮かべ、それを翌日馬に乗った時やってみるぐらいの努力がなくては、学生生活 4 年といっても正味二年半の短い期間はすぐに終わる。(略) 馬と話をしながら馬を動かす、馬も人に応えてそれなりの動きをする。そこに一日の練習のさわやかな思いとよい結果が生まれてくるものである。(後略)」

そして岡田さんは、ロサンゼルス五輪の大障害競技で優勝した西大尉と名馬ウラヌス号を引き合いに出し、次のように続ける。ちなみに西大尉は硫黄島で戦死している。

「西さんとウラヌスの間にも随分激しい闘争があったと聞いている。象の様にでかいウラヌス、半血種特有のしつっこさ、生半可な扶助には従わないしたたかさ。これらがイタリアの騎兵将校にウラヌスを手離させる原因となった。その馬を西さんが買い取り、ここに巨漢と巨象の闘いが始まった。そして巨象が負けて西さんの言うなりに動く馬になった。そして輝かしいオリンピック大障害優勝となった。えらそうな事を書いたが要するに馬を自由に動かす事が馬術の最大の要件で、その事に向かってあらゆる努力をかたむける。この事を部員に強く強く訴えたい。」(後略)。

どうです、まさに「名監督の名言」ではないか——。

◎モルガン種のこと

この頃の馬術部長は、農学部林産学科の半澤道郎教授だった。半澤部長は同じ部報に、アメリカで最も古い伝統を持つモルガン種を紹介し、「サラブレッドが 3 頭の種牡馬に源を発しているように、モルガンは 1 頭の優性遺伝力の強い種牡馬から引き継がれた血統である」と解説して、北大馬術部の「血統のよさ」を強調するのだった。

◎北 18 条の「新居」まで

北大の「学内」というと、南北は北 8 条から北 18 条までであった。その先は農場が広がる。学生時代、北 18 条で市電を降り、学内に入り突き当たると、住んでいた「恵迪寮」があった。その通り道に、いつの間にか大学の馬場と厩舎が引っ越していた。気づいたのは、二度目の札幌勤務となった平成 2 年ごろ。久しぶりにウマに乗りに行ったら驚いたものだ。北大のウマたちのポプラ並木とのお別れであった。

そこは昔、「第二バーン」と言っていてクラーク先生の設計による文化財「飼料庫 (モデルバーン)」があったところ。その奥は北大開学当初の面影を残すエルム (楡) の森が続いていて薄暗く、足を踏み入れたこともなかった。北大構内はそれほど広かった。馬術部がいつこの地に移ったのか、筆者 (生田) が卒業した後で入部した瀧澤南海男 (S39 年度主将) が、部報に「ポプラ並木の頃」と題して書いているから引用する。

「私にとっての馬場は今でもポプラ並木の傍らにある。何時でもポプラを見上げ、ポプラの影を踏みながらの部活であった」と書き出し、「朝清号」や「北嶺号」など個性的なウマの思い出を語り、「部室」「合

宿」「作業」へと書き続ける。やはり同じ思い出を共有していたものとみえる。「部室」の項は次のように始まる。

「当時、部室は第一農場の厩舎の中にあった。中には二段ベッドとストーブ、長靴棚の他は大した物がなかったように思う。通路を挟んだ向かいの部屋には冬の間、ブタの餌とするための馬鈴薯がやま積みになっており、腹ペコの部員のよいおやつになっていた。」

続いて「合宿」。「当時の合宿所は農場倉庫の二階であった。この倉庫がかなり大きい建物で 30～40 人の部員が狭さを感じずに寝ることができ、そのうえ十分な広さの宴会場のスペースまで取れた。合宿が始まると、二階への上がり下りする階段は、さながら地獄の通路と化したものだ。というのも合宿のスケジュールがいま思えば凄いのだった。まずランニングを 2～3 回こなし、馬装を終えてから、腕立て伏せとうさぎ跳びをそれぞれ 100 回程と、馬場に移動してからは飛び乗り飛び降りを左右 20 回ずつやらされ、やっと馬に乗ったと思えば鑑上げの軽速歩とくる。まったくもってほとんどいじめの世界であった。」

こんなきつい思いをしながらも、みんなポプラ並木傍の厩舎と馬場に親しんだものだ。

◎新居の馬場開き

北 18 条の新居に移転したのは、昭和 46 年秋だったようだ。先の半澤部長が 46 年度部報の「巻頭の言葉」に書く。

「大学当局、文部省、文化庁、その他多くの関係者の方々の好意と援助によって、念願していた馬場と厩舎の新築移転が実現し、旧第二農場の東南端の一角に、重要文化財になった建物（第二バーン）を背景に落成、晩秋の 11 月 23 日、馬場開きを行った。（後略）」

これが北 18 条の馬場と厩舎であった。馬場も厩舎も部室も、前に比べると少し狭い。それはやむを得ないことで、新しさと「文化財の地」であることが売り物であった。この頃、岡田監督がまだ札幌市の土木局長を務めていたこともあって馬場の整備に力を貸し、ダンプカー何台分もの土を運んで馬場に築山を築いたり、環濠を掘ったりして練習コースを整えた。

◎御殿厩舎と御殿馬場へ

このころ筆者（生田）は、読売新聞北海道支社から本社、千葉支局次席、前橋支局長へと目まぐるしく異動し、先にも記したように、平成 2 年（1990 年）に札幌で二度目の勤務をした時ようやく北 18 条厩舎を訪れている。しかしこの頃すでに、厩舎と馬場はさらなる移転を迫られていた。昭和 59 年度部報第 30 号の「巻頭言」に、小池寿男部長が記している。

「厩舎および馬場のある北 18 条通りの環境も大きく変わりつつある。南北に長く、北 8 条から北 24 条までに存在する北大キャンパスのうちで、東西を貫く道路はこの 18 条通りのみである。したがってこの道路の交通量も飛躍的に増加し、道路としての重要性も増している。この道路は従来から札幌市の都市計画の中では環状道路の一部として幹線道路とされており、この北大構内の部分を除くと環状道路の大部分はほぼ完成している。したがってこの部分の改修が注目されることとなる。学術研究の場としての北大と、都市機能を考えた札幌市の立場との違いからなかなか進展がみられなかったが、近年この 18 条道路問題はやや具体化のきざしがある。そうすると馬場の位置や広さについても大きな影響があることとなる。したがって、早い機会にこの問題についての対策をよく考えて対処していく必要がある。このような面からも、今年是一个の節目となるものと考えられる。（後略）」

馬術部長が「巻頭言」で書くにしては、いささか奥歯にモノの挟まった感が無きにしても非ずだが、それだけにじわじわと馬術部の移転話が出てきたことがうかがわせる。ちなみに小池部長は執筆の日付を「昭和 60 年 2 月 28 日」としている。筆者が金沢に転勤する年であった。馬術部に思いを馳せるゆとりはなかったが、その頃はどんな運営をしていたのか、昭和 59 年度の部報から、ウマの飼育状況、対外成績、会計などを拾い上げてみる。

◎ウマの飼育状況や戦績など

北大馬術部はこの頃、どん底状態であつたらしい。前主将の平石哲男(S60 卒)が部報に悔し紛れに書き残す。『結果がすべて』という点から見て、自分が主将を務めた去年一年、これは失敗でありました。主将の任に就き、まずやろうとした事は、馬の調教方法の見直し。『輪乗りを中心とした基本的運動を正確に行い、同時に基本的扶助を見直す』というものでしたが『従来の北大方式とのギャップをどう埋めたらよいか解らない』『自分自身経験も実績も無いに等しく、確たる方針が解っていない』等の理由により、成功しませんでした」と正直に告白している。

主将町田憲司(S61 卒)の「現況報告」では、戦績は「5 年連続全日本学生団体戦に出場ならず」と情けない。部員 17 人。うち女子 9 人。年間経費 600 万円。収入源の 300 万円はバイトによると記す。そのバイト先は、朝日新聞（選挙など）、乾草作業、競馬場（中央・道営）、生協の棚卸し等。成績は上がらなくてもアルバイトで部費を稼がなければならない。読んでいてナミダが出る。練習時間は、冬一午前 5 時半から 7 時 45 分、夏一午前 5 時から 7 時半と記しいつでも見に来てくださいと書き足しているのがいじらしい。そして「目標」は、「北日本学生大会において、「二走」、「総合」の権利を三頭以上取り、全日学に「団体」で出場すること」と。

◎その頃のウマたち

部員が少ないわりにウマの頭数は多い。もちろん最初の「六頭のウマ」(S30 年代)は一頭もいない。驚いたのは血統のいいウマが多いことだ。昭和 59 年現在の「自馬」は全部で 10 頭。うちサラブレッド（以下サラと記す）8 頭、中半血・軽半血が 1 頭ずつ居る。

- ・ **ドン・ホッパー 号** この時代の部員に一番親しまれたのは「ドン・ホッパー号」。昭和 46 年 6 月、早来町生まれの騙馬（去勢馬）・中半血・黒鹿毛。父・オーシャチ（サラ）、母・ハゴロモ（ Trotter）。あの「ミストクシマ・北標号」の生まれかわりのような剽悍なウマで、成績を上げられなかったのは乗り手の技術不足に問題があったとしか思えない。
- ・ **北 姫 号** 昭和 49 年 3 月、静内町生まれの牝・サラ・鹿毛。父・アステック、母・ヤマニンザザ。当然ながらともにサラ。「体力・素質は十分」と寸評しているが、それで成績が上がらないのは、やはり調教技術のまずさが原因か。
- ・ **北 騷 号** 昭和 51 年 2 月、北大馬術部で生まれた騙馬・軽半血・黒鹿毛で、父が自馬のドンホッパー、母・羊蹄。寸評に「馬格は小さいが調教ができており小障害程度なら確実」とある。かつて小障害程度なら「朝清」「幸運」といった農場のウマでも跳んだ。調教技術より、自馬に子を産ませ育てる技術に長けていたということか。
- ・ **北皇子 号**： 昭和 51 年 5 月、新冠町生まれの騙馬・サラ・栗毛。父・アストラルグリーン、母・

ハーバーガールとともにサラ。「目標、日本一」と雄大だが、さて――。

- ・ **北 耀 号** 昭和 46 年 3 月、浦河町生まれ、騙馬のサラ・鹿毛。父・ヘンリーヒギンス、母・タマホマレ。写真で見ると、いかにもたくましいのだが――。
- ・ **北紫雲 号** 昭和 53 年 4 月、静内町生まれ騙馬のサラ・鹿毛。父・ホープフリーオン、母・クイーンマリーナ。この年 8 歳の若いウマで、北大に引き取るまでは「マリ」と呼んでいたらしい。馬体のいいウマだから可愛がるだけ可愛がって厳しい調教を怠ったものだから、ヘンな癖がついて一旦は「離厩ということになった」と当時の部報にある。
- ・ **ノエル 号** 昭和 50 年 4 月、浦河町生まれ、牝・サラ・芦毛。父・フォルティノ、母・シンクイン、当時の先輩からの寄贈だという。これも最初の障害飛越調教に失敗して、拒止や落下の癖をつけてしまった。癖はすぐにつくが、直そうと思ったら何日もかかる。
- ・ **北 冴 号** 昭和 53 年 4 月、鶴川町生まれ、騙馬・サラ・栗毛。父・ハウシュウエイト、母・アモレーターフ。寸評に「馬格、素質は十分」とあるが、これも飛越の調教に失敗したらしい。最初、競馬場の調教師が乗っていたとのことなので、悪いクセがついたのかも――。
- ・ **北 銀 号** 昭和 55 年 4 月、上川町生まれ、騙馬・サラ・鹿毛。父・ヤマブキオー、母・ソーゴータカラ。入厩して 2 年目の若コマで、半澤部長に調教を依頼したとある。

このほか入厩したばかりの **北玲号**（牝・サラ・鹿毛）もいたが、59 年度部報から拾ってみて「何故こんな血統正しいウマが多いのか」と不思議に思った。まるで「宝の山」だ。好景気が続き繁栄の絶頂期にあり、競走馬・乗馬があり余っていたとしか思えない。そのウマたちを調教できない。「あのときこのウマがいたら」。口惜しい気持ちにさえなってくる。

§ (その五) 自馬の飼育

◎資金作りのアルバイト

ウマを飼育するのに一体いくらかの費用がかかるのか。ポプラ並木傍の厩舎にいたころは農学部、あるいは農場の所属馬になっていて飼料代などはかからなかったが、それでもタダで食べさせてもらう訳にもいかず、デントコーンや夏草を刈ったり、農場の牧草上げを手伝ったりして、それなりのアルバイトはしていた。切りワラに混ぜる燕麦、フスマやカルシュウム、塩分などは部費で購入せねばならず、このほかにも色々と経費がかかり、いつも貧乏所帯だった。そんな時考えついたのがダンスパーティーなどによる金儲け。自馬 6 頭を持った時の大久保主将が「馬術部三十年史」に書き残している。

「頭を悩ましたのは金銭問題だと思います。念のために「入部金」・及び月々の「部費」を記してみると、昭和 28 年度「200 円」・「150 円」、昭和 29 年度「300 円」・「150 円」、昭和 30 年度「300 円」・「200 円」で、運動部中最高額でした。これでも一つも部室は良くなり、遠征資金、大会の経費は常に不足して居りました。ここに至ってついに金儲けを考えました。

其の一つは、部主催のダンスパーティーです。パーティーの歴史は昭和 27 年に北大の雨天体操場で土、日の 2 日間、続けて開催したのが始まりかと思います。その時は入場料「50 円」でしたが、2 日間で「14,000 円」ほど利益があったと思います。」 いわばボロもうけ。これを機に各運動部も頻繁にパーティーを始めるが、馬術部ほどの人気は集まらない。

やがて馬術部はそこそこ貸しホールを持っていた産業会館と安くわたりをつけ、そこを入場料 100 円

で常設の会場とする。入場税は 30%徴収されたが、学生という地位を大いに活用して「大久保流」にうやむやにしたという。「だから一夜にして 2 万 4～5 千円は利益が有りました」と書く。つづけて――

「其のパーティー券も部員全員で各地に売り込み、前売券だけで 200 枚は下らなかったと思います。また一種のパーティー族を作り上げ、御希望にこたえるべく部員のダンスレッスンもところ構わずよく調教したものです。おかげで馬術部のパーティーは女性が非常に多かった事も他の部にねたまれた理由の一つでした」

会場に来てダンスの相手が見つからない女性を「壁に咲く花」と言った。そのお相手をするのが馬術部員というわけで、筆者（生田）なども入部してウマの練習が始まると同時に、「ダンスを習え」と半強制的に言われ、大学のレッスン場に通ったものだ。そして二年になると部のマネージャーを命ぜら、マネージメントと言うよりはもっぱら資金集めの役目となった。ダンスパーティーを開くにしても、部の「伝統」があるから、前売券は多く売らねばならないし、税金はふんだんにごまかさねばならない。「石狩税務署」の丸印を何枚も何枚も写してごまかしたり、わざと端をずらして一度にスタンプして「無税券」を作ったりしたものだ。税務係りは横目で見てわかっていても見逃してくれる。立派な犯罪であった。

アルバイトはほかに「ポスター貼り」「サンドイッチマン」「ウマを使つての宣伝」などいろいろやったが、一番大掛かりだったのは映画「敵中横断三百里」の島松での長期ロケーション。約一週間、現場に泊まり込み、最後は「突撃ッ」の場面で農耕馬に乗ってウマもろとも横倒しになる難しいシーン。幸い成功したものの、西部劇のようなわけにはいかなかった。これでウマは一日 500 円。人間 300 円だったか。

ウマを使ったアルバイトは、五月のメーデーに全道労働者団体協議会（全道労協）から頼まれてデモ行進に加わり、大学側に見つかって後で杉野目学長に呼び出され、こっぴどく叱られた事がある。とにかく金儲けに「右」も「左」もなかった。

◎北 18 条時代の会計簿

馬場・厩舎が北 18 条に移ってから会計簿を二、三、部報から拾い出してみる。

昭和 58 年度は「飼料」120 万円、「蹄鉄」140 万円、「輸送」107 万円、「その他」270 万円など、計 665 万円。これに対して収入は、「部費」21 万 5 千円、「バイト」305 万円、「補助」168 万円、「その他」112 万円の計 608 万円。支出超過の「赤字」になっている。部員の「バイト」が大きな収入源になっていることは変わらない。

60 年度の支出は、「飼料」97 万円、「蹄鉄」154 万円、「輸送」133 万円など計 651 万円。対して収入は、「部費」18 万 6 千円、「バイト」255 万円、「補助」166 万円、「滞納金」75 万 8 千円など計 614 万円で、やはり赤字。収入の中には「千葉幹夫氏より寄付」の記入もみえる。

このあとを見ていっても、支出では「飼料」185 万円台と「蹄鉄」195 万円台は年々さほど変わらず、成績が良いと中央大会への「遠征費」がかさんでいる。注目するのは輸送費に代わって「ガソリン」「高速」「車両」といった支出項目が出てきたことで、これは「馬運車」を持ったことによるらしい。

◎北 18 条時代の戦績など

昭和 46 年度秋に北 18 条厩舎に移ってから暫くしてウマも落ち着いてきたのか、成績が上向きになってきた。60 年度の部報第 31 号に陣川雅樹主将(S62 卒)が記す。

「昨年、我が北大馬術部は、数年ぶりに全日学の団体出場を果たした。ドン・ホッパー、北皇子、北耀

の3頭である。しかし、ドン・ホッパーや北耀はすでにもう16歳、この馬たちにいつまでも頼っていてはいけない。後に続く、この馬たちを追い越していく馬を作っていかなければ、本当に北大が強くなったとはいえないのだから」

このころ北海道で強かったのは、帯広畜産大学と酪農大学。この2校との三大学定期戦では、最下位になっている。北大が強さを取り戻したのも束の間だった。

平成6年度の部報第40号に鎬木照夫主将(H8卒)が記す。

「現在(平成7年3月)部員16名、馬11頭で北大馬術部を強くするよう頑張っています。北大の低迷の原因と、どうしたら強くなれるのかについては日頃から話し合っていることであり、これからも更に考えていかななくてはいけないことです。北大が弱い原因は人と馬とに一貫した教育がなされていないことにあります。北大には酪農のようにコーチはおらず、畜大のように一貫した馬造りのセオリーもありません。これからは他大学の調教の方法を積極的に取り入れ、またコーチ不在の分を各チーフの話し合いによる一貫した下級生教育で補っていかななくてはなりません。また騎乗に対する食欲さと、やらねばならないという強い意識を一人一人が持つことが必要です」。いささか情けない方針ではある。

そして最後に「今年は馬の出し入れもうまくいき能力のある馬が残ったので、一致団結して試合に臨めば、全日学で団体を組むことができる」と望みを託している。

ではその「離厩」と「入厩」はどうなったか、これも昔に比べると贅沢な話なのだが――。

◎「離厩」のウマと「入厩」のウマ

離厩したのは「北瑛号」「グレンエトワール号」「北遥号」「北鷲号」の4頭。入厩は「北帝号」(サラ・騙・鹿毛・6歳)、「北祥号」(サラ・騙・鹿毛・7歳)、「北獅号」(中半血・騙・栗毛・9歳)の3頭。これで持ち馬は11頭になっている。ドン・ホッパー、北皇子、北耀号などはすでにいない。この年入厩したウマと、その後18条厩舎に加わったウマとを合わせて紹介する。

- ・ **北 帝 号** 平成2年6月、浦河町生まれ、サラ・騙・鹿毛。父・トウショウボーイ、母・オーナーブッチ・旧名はマチカネイーリアス。平成6年8月入厩。優秀な種馬の血をひく。部報での馬事紹介はダラダラと言いわけばかりで結果が知れる。
- ・ **北 祥 号** 平成元年2月、えりも町生まれ、サラ・騙・鹿毛。父・リードワンダー、母・イワサンパワー。旧名はシンコウスピリット。平成6年11月入厩。運動量は普通だったが肩の筋肉を痛め跛行をひきはじめる。これも調教のまずさか。
- ・ **北 獅 号** 昭和60年、ニュージーランド生まれ。中半血・騙・栗毛。父・マイ シアアボン、母・不詳。旧名シャディーデュードゥ。平成6年12月入厩。馬格、性格ともによく、2年連続の全日学出場を目指したが失敗。騎乗者は「推進が足りなかった」という。
- ・ **北 優 号** 平成3年4月、浦河町生まれ。サラ・騙・栗毛。父・ニシノライデン、母・エムジーマウタ。旧名ビコーエオン。平成7年7月入厩。馬事紹介を読んでいて、サラブレッド馬を乗りこなしきれないはがゆさを、ひしひしとを感じる。
- ・ **北 鈴 号** 平成4年3月、門別町生まれ。サラ・騙・鹿毛。父・スズマッハ、母・メイワレディー。旧名スズロード。平成8年7月入厩。冬に肩のコブが肥大して破裂。馬場運動のウマにしようとしたらしい。その後障害馬に。方針が定まらないのと鞍置きのみが課題。
- ・ **北 蘭 号** 昭和58年3月、浦河町生まれ。サラ、牝・栗毛。父・ハウヨウボーイ、母・ワールド

カホー。旧名アーネストヒダカ。平成 9 年 3 月入厩。このウマの調教報告で、「馬の状態、反応が悪いのはすべて騎手のせいである」と正直に反省している。

- ・ **北 彪 号** 平成 2 年、ニュージーランド生まれ。サラ系・騙・栗毛。父母ともに不詳。旧名グラッドリー。平成 9 年 3 月入厩。前記アーネストヒダカとともに中央競馬会の先輩(S53 卒)のお世話で入厩。部員の数の割に乗るウマが多すぎると、贅沢なグチをこぼしている。だから調教も進まない —— の言いわけ。
- ・ **北神威 号** 平成 3 年 3 月、浦河町生まれ。サラ・騙・鹿毛。父・アスワン、母・ユキノローズ。旧名ランフォーローズ。平成 9 年 10 月入厩。競走馬時代から屈腱炎の症状があつて熱をもちやすく、それさえ治療すれば北大のエース馬になるのも夢ではない・・・と。
- ・ **北 蒼 号** 平成 4 年 3 月、八戸市生まれ。アングロ・アラブ・騙・栗毛。父・カミカゼイチバン、母・トワイライトブルー。旧名母と同じ。平成 10 年 3 月入厩。「馬場も障害もそこそこでき、調教も順調。主戦馬になるのもそう遠い日ではない ——」と期待を持たす。

◎馬術部の一日

これらの入厩馬、在厩馬を抱えて当時の部員たちはどんな馬術部生活を送っていたのか。平成 10 年度の部報第 44 号に、「特集 馬術部の一日」が掲載されているので一部引用する。記入者の署名はないが、どうやら女子部員が書いたものらしい ——。

＜現在の馬術部について紹介したいと思う。まず初めに当番について。当番は朝・昼・夕・夜と四つに分けられ、一人が週に各当番を一回ずつ行ふ。これは基本的に馬が一日四食を撮るために行うものだ。

- ・ **朝 当**＝午前 3 時 50 分起床。私は眠い目をこすりながら星空の下自転車をこぐ。どうしてこんなに早く起きなきゃならんのだと心で想いながら部室に到着。泊りの男どもを起こし、彼らをおいて一足早く朝当を始める。朝当は基本的に午前 4 時 30 分から始まる。内容は馬を厩舎から出して、馬房上げをすることだ。この作業をいっしょに行う人によってかなり時間差が異なる。自分より早い人がいると助かるし、自分より遅い人がいると、とても自分に負担がかかってしまう。しかし 4 馬房上げたとなると、妙に充実感に満たされて逆にうれしくなる。その後 5 時集合で練習が始まる。朝当は大変な面もあるが他の人より早起きするため、爽快感を覚える。これこそ早起きは三文の得。
- ・ **昼 当**＝午後 0 時 10 分開始。主な内容は放牧する馬の入れ替え。放牧は午前と午後に分かれており、馬が馬房内でボーとしてストレスを溜めることがないように行われる。（略）またボロ取りや飼い作りが手際よくいかないと 1 時ごろまでかかってしまう始末。3 講目に講義が入っている場合は昼ご飯など食べる時間がない。肝心な昼の 1 時間を昼当に費やさなければならないというのは辛いものだ。
- ・ **夕 当**＝午後 4 時 30 分開始。外に干していた藁を入れ、寝藁をふかふかに敷いていく。また水缶を洗い、飼いをつける。藁入れは外の藁を集めることがとても辛い。何せ非力な女の子だから一度に藁をそんなに集められないし、誤って集めた場合には重くてどうしようもなくなることがある。それは水缶運びも同様である。運んでいるうちにどんどん水が飛び散り水はなくなるは自分はびしょびしょになるはで最悪の状態。啞然とするしかない。ここに「曳馬」「手入れ」が入り、夜の「投げ草」となる。
- ・ **投げ草**＝午後 9 時、水缶の水足しと草を馬に投げてあげる。男子が主に行う。
- ・ **宿 直**＝男子のみ。部室に泊り朝当で起こされるまで床に就く。（後略） >

§ (その六) ウマたちの新御殿

◎北 24 条厩舎への移転

札幌市の明治・大正・昭和・平成の市街地図を開くと、この街がいかに発展してきたかがよくわかる。明治の地図はまだ「札幌村」。東に苗穂村、西に琴似村がある。開拓使から北海道庁になっているものの、北大はなく、その前身の札幌農学校が現在の北 1 条「時計台」の場所にある。時計台は最初から移っていない事がわかる。現在の北大の位置には「農芸伝習科」があり、広い農地を持っていたようだ。北 10 条から北は「札幌中学校」の広い敷地。その先は「農学校附属農園」と書いてあって、これが後に北大の「第一・第二農場」になったと見える。

大正 10 年の地図になると、明治の地図にあった「札幌第一中学」のに西側一帯に「北海道帝国大学」が忽然と現れ、広い構内を示す。それでも校舎が点在するのは北 8 条から北 13 条までで、広い土地を持て余しているようにも見える。周辺はすべて農地だった。道庁の西側、植物園は現在よりさらに大きく、広く、中央に「博物館」と図示されている。

大正 10 年で市街地は北 15 条まで伸び、その先は北 20 条まで整然と区画割りされている。いくらでも人口受け入れ可能という状態。北 18 条道路は、やがて環状道路になるように一本だけ西に伸ばしており、これが何十年か先に馬術部の移転先になり、さらにここから北 24 条厩舎への中継になったと思うと、歴史の面白さを感じずにはいられない。

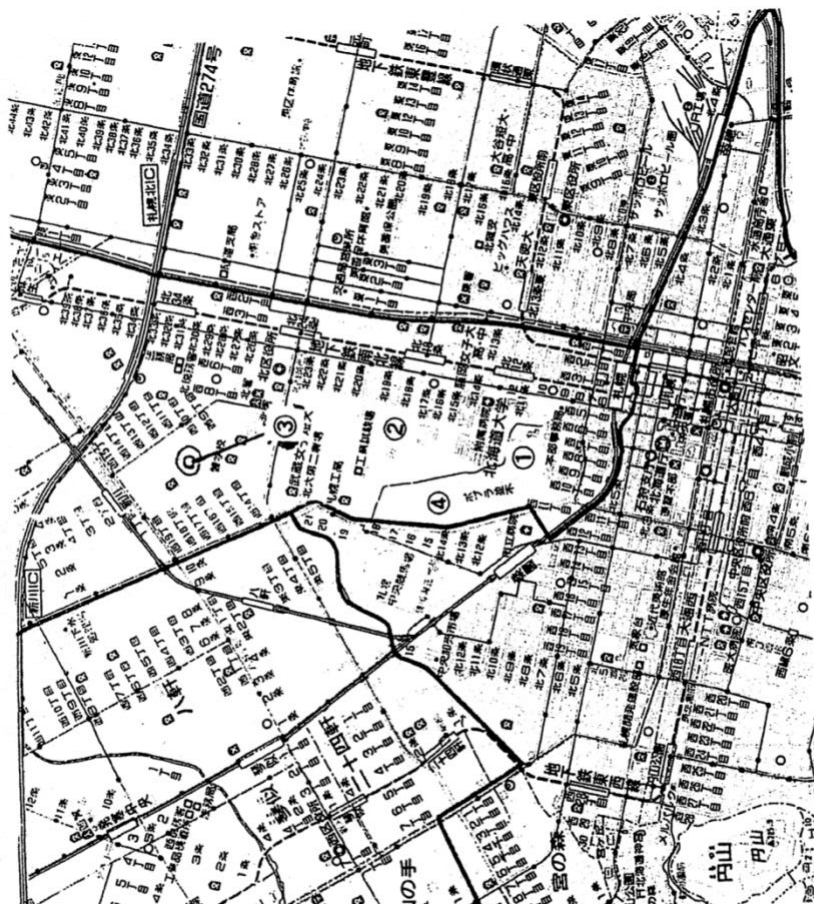
昭和 11 年の地図は、北 8 条から北 24 条まで広大な「帝国大学」の敷地が広がり、北 24 条より北と西はまだ区画割りも出来ていない。まるで未開の地で「琴似村」に境界を接している。帝国大学の敷地内に現在の大学病院があるほかは、すべて第一・第二農場の用地。北 18 条通りの奥の「恵迪寮」は図示もなく、エルムの森の中に埋没していたことが分かる。

札幌駅は「停車場」から「駅」に名前を変え、大正時代まであった広い「札幌第一中学」の跡はない。市街地に組み込まれている。筆者（生田）が学生時代（昭和 30～34 年）でも北 18 条から北は寂しい街のはずれの感じがし、めったに足を向けなかった。北 24 条まで市電が通っていたが、北 25 条の先は「大学村」といって北大教授らの官舎があるくらいで、普通の民家はなかったように思う。

平成の地図には「ポプラ並木」の図示がある。この傍で昭和 29 年から 46 年まで初代の馬場・厩舎を営んだ。馬術部の「六頭のウマたち」もここで年を重ねた。

馬場と厩舎が北 18 条に移った場所は、完全に大学構内に組み入れられ、獣医学部や工業試験場などの名前が見える。そして北 24 条はとなると、バス路線が走り、近くに北区役所が出来、地下鉄南北線が横切るようにして伸びる。そこへ平成 9 年（2001 年）、馬術部としては三代目に当たる御殿のような厩舎と馬場ができた。まさに 21 世紀の幕開けにふさわしい移転であった。

つぎのページから「明治」「大正」「昭和」「平成」の 4 枚の地図を並べ、比べて見る。



現在(平成24年)の札幌市地図

- ① 最初の札幌市(昭和46年まで)
- ② 北18条市(1999年まで)
- ③ 北24条新市

④ ポプラ並木



昭和11年の札幌市地図

- ① 北海道帝国大学
- ② 大学病院
- ③ 植物園
- ④ 第二農場バーン(現重要文化財)

◎ 『馬場移転記念号』から

平成 10 年度の部報第 44 号は「馬場移転記念号」として、北 18 条厩舎からの移転経過を当時の市川瑞彦部長が記している。

「北 18 条馬場が接していた北 18 条道路については、昭和 54 年、56 年の二回にわたり、札幌市から道路整備計画（北 18 条通りを環状線の一部として拡幅・整備する計画）を推進したい旨申し入れがありました。これに対して北大は評議会決定として『大学の主要な教育・研究施設、文化財などが集中立地するキャンパスの真中を幹線道路が通過するものであるため、本学の教育・研究及び管理運営に及ぼす影響があまりにも大きく、大学としてはこれを容認することはできない』と回答し、『地表で通過交通を通すことは認められない』など 8 条件を提示してきた」

昭和 54 年ごろというと、筆者（生田）は千葉支局次席だったころ。成田空港闘争のさなか、過激派による空港管制塔の乗っ取り、続く嚴重警戒のもとでの開港の取材などがあり、北 18 条道路問題などに関心を持つゆとりはなかった。市川部長の記述は続く。

「平成 4 年に札幌市から再び協議の申し入れがあり、先の 8 条件をクリアしていることを確認。馬術部が計画の『障害物件』となり移転問題が浮上した」

こうして平成 9 年 4 月以降、馬術部問題を中心に検討が加えられ、北 24 条への移転が決まる。市側が施行するもので、平成 11 年 3 月 1 日の竣工引き渡しとなる。概略次の通り。

◎ 新しい施設

・馬 場： 18 条の敷地面積しか認められないという制約の下で次の内容とした。

- ① 本馬場を 60 メートル×90 メートルとし、馬場馬術の競技を二面同時にできるようなスペースをとった。
- ② 準備馬場（60 メートル×約 49 メートル）と本馬場の間は、移動柵で区切ることにし柔軟性を持たせた。
- ③ この結果、旧パドック、傾斜地を敷地内に持ち込むことはできなかったが、20 メートル幅の周辺緩衝地帯のスペースを有効に活用することで対処した

・部 室：厩舎と部室を火災防止の観点から別棟とした。部室は「男子」12.5 畳、「女子」6 畳、更衣室、男女別トイレ、シャワー室からなる。二階は合宿所（44 畳）及びバルコニーからなり、バルコニーは試合の際には審判席として使用できるよう外からの階段を設けてある。

・厩 舎：14 頭分の馬房・飼料庫・鞍置き場・装蹄所（兼洗い場）からなる。中央の通路は広くしたかったが、旧面積との関係で断念し、その代わり格子戸をとりつけ、場合によりウマが首を出せないようにした。馬房は幅が 30 センチほど広がった。

・乾草庫：天井裏の乾草庫とはお別れし、別棟の乾草庫とした。トラックの乗り入れが可能で、ロール乾草をそのまま運び込める。建築費は後援会の寄付に頼った。

写真で見ると分かるが、大学馬術部の施設としては、おそらく日本一ではないかと思う。成績もこれに見習えばいいのだが――。

新厩舎へは筆者生田のマイカーで、できたばかりの平成 11 年 3 月、まだ雪の中にある厩舎を尋ねた。北 24 条通りから見た遠景と、赤い三角屋根の部室、ドーム型の厩舎など持参したカメラに収めた。

◎ 北大のウマたち（1）

この「御殿」のような厩舎に、どんなウマたちがいたのか。馴染み深いところから紹介する。

- ・ **ドンホッパー 号** このウマは昭和 46 年生まれの中半血、黒鹿毛の騙馬で筆者の学生時代のお手馬「北標号」に馬体が似ている、と以前どこかに書いたが、ドンホッパーに騎乗したことはない。「北標号」は元の名を「ミストクシマ」ということでもわかる牝馬だから、騙馬のドンホッパーとは性格が違うかも知れないが、調教報告を読むと似ている点も多い。
昭和 58 年度部報の調教報告、高須哲男（S59 卒）を読むと、障害に対して「嫌な物はとことん嫌」と記している。やはり性格が強かったのだろう。この年ドンは 14 歳。全国制覇を祈って報告の筆を置いているが、願いは適わなかったようだ。
- ・ **北 将 号** サラには珍しい芦毛馬。昭和 58 年の調教写真を見ると 8 歳か 9 歳で、品のいい芦毛色に変わっている。調教報告、世良健司（S59 卒）で「馬場は非常に落ち着いて運動し、性格は素直で我慢強い。そのためもの覚えがよく、実に乗り易かった」と記す。写真で見ると馬格は太く大きく、神経も凶太そう。しかし「実際は非常に気の弱い一面をもっていた。外乗での興奮は何かに対する恐怖からくるのではないかと思われたし、入場した途端に騎座から伝わってきた激しい鼓動には驚かされた」。これは最初の調教のとき、何かに驚くか、危険なものを感じたかして、その記憶がいつまでも残っているせいではないか。この興奮を収めるため最初はが外乗ばかりしていたというのがこれは逆効果だったと思う。
- ・ **北 驪 号** ドンホッパーの子。「生まれも育ちも北大と云う北大の箱入り息子」と部報に記す。そのころは 8 歳の絶頂期。しかし調教がうまくいっていなかったようだ。調教報告に平石哲生（S60 卒）が書く。「引き継いですぐは、扶助に鈍く、馬体は伸びたまま。加えて人間の方で馬の理想的状态、調教の方法が解っていない。毎日暗中模索だった」と告白している。
東京オリンピックに出場した北大馬術部出身の千葉幹夫（S34 卒）が馬術部に来て、このウマに乗ったことがあるらしい。「千葉さんの来札の折に乗っていただいた。その直後乗ってみたら『人の命令を聞こうとしている態度』が感じられて感激した」という。乗り手の調教が先だった。
- ・ **北皇子 号** 馬名が素晴らしい。性格もよさそうだが、こちらで調教する乗り手が悪い。59 年度の部報第 30 号に町田憲司（S61 卒）が素直な調教報告を記している。
「調教を任されてからちょうど一年。去年の今頃という、暗中模索の段階で何をしたらよいのか、何をすべきなのかが全く分からず、試行錯誤するのみでした。いや、この時ばかりでなく、シーズンを通して錯誤ばかりを繰り返し進歩がなく、不本意な試合ばかりを残しておりました」
これではウマが可哀そう、名前が泣く。報告の最後に記すように「おまえの能力のすべてを出し切ってやれなかったことを許してくれ。日本一になる能力と素質を備えていたのに」。
- ・ **北 耀 号** 愛称をピーターと呼んでいたようだ。血統も馬体も文句なしだが、これも調教がついていけない。58 年度の部報でこのウマを任された野中道夫（S59 卒）は、「調教報告と呼べなくて——」と、もっぱら自己反省に終始している。もったいないことだ。

§ （その七） 無くて七癖

◎ 北大のウマたち（2）

新しい厩舎に入ったウマ、厩舎が完成する前に離厩したウマ。いずれも部員たちが手塩にかけたウマたちだったが、ケガや癖で部員を悩ませたウマも多い。前章に続いて紹介する。

- ・ **北紫雲 号** 昭和 53 年生まれで入厩した若ゴマだったが、きちんとした調教が出来ていなかった。競技で試合場に入るのをきらい、入っても扶助を全く無視して興奮する悪い習性があった。それでも北大の馬場で障害物に向かうと拒止することを知らず、安心して試合に出すと狂奔したりする。要は騎手との信頼関係であった。ウマが乗り手を信頼していない。だからこのウマは臆病であった。

- ・ **北 姫 号** 昭和 59 年度部報の調教報告、谷山豊三郎氏によると、このウマは「ミヨ子」という愛称で呼ばれていたようだ。可愛いニックネームの割りに「意地悪い娘だ」というイメージが強かった」と記す。これではダメだ。先入観を持つと、ウマは敏感に悟ってしまう。

しかもこのウマには背中に障害があった。鞍を置いて乗るとひどく痛がる。鞍傷にもなりやすかった。谷山が乗った時、12 歳というが、左前肢に骨瘤があり、それでも「スティープル（広地走行）では気が狂ったように走り、走りまくった後でさえ、しばらくすれば平気な顔」と記す。これでは全くウマが哀れ。一体獣医に診せた事があるのか聞いてみたいところ。

- ・ **ノエル 号** このウマも写真で見ると限り能力はありそうなのに、乗り手がダメにしてしまったのではないか。59 年度（ノエル・9 歳）の部報で国枝由紀（S60 卒）が記している。

「障害前にハミをはずしたら必ず「止まる」ということは前から分かっていたことだったのに、それを一週間前にやってしまった。それがきっかけになって人と馬のタイミングがずれ始め日に日に溝が広がってしまった」。ウマのハミを外すなど、基本動作がなかったのではないか。俗に「ハメを外す」というアレである。ついでに「ラチ（埒）も無い」を云っておく。「ラチ」は馬場の四辺を囲う低い柵。埒から出ると失格になる。学生時代の全日学大会総合馬術競技で、入賞候補の愛馬「北標号」がわずかに「ラチ」を外し失格になった苦い経験も筆者にある。

- ・ **オオカリヒメ 号** アラブの芦毛ときたら、高貴な御方のご乗馬と相場が決まっている。このウマもやや胴長ながら、アラブ種特有のノーブルな顔つき。昭和 59 年、15 歳の頃は、女子部員中川千賀子（S60 年卒）がこのウマの担当だったようだ。部報第 30 号に記す。

「乗って行くにつれて、一旦やる気になったら、がらっと変わり動かしやすくなるのが分かった。ある程度までの調教が進んだ馬なのでそういう状態になると得るものが多かった。まず、やる気を出させる運動を進めることが毎日の練習の第一の課題だった。」

しかし「形ばかり求めていたため、強引に演らせたり、無意味な鞭や拍車で馬を惑わすことが多かった」と反省している。

- ・ **北 冴 号** 昭和 59 年度の部報第 30 号に平石哲生（S60 卒）が記す。「北冴は道営競馬調教師が障害も飛ばしていたということで、少し無理とは感じたがシーズンで使えるよう調教を進めてみた。結局あせってしまった」。競馬の障害と馬場での障害は違う。やはり一からやらねば。

- ・ **北 銀（しろがね） 号** 昭和 59 年度部報には、半澤道郎教授（第 6 代北大馬術部長）がこのウマの調教報告を記す。

「無理にお願いして入厩させて貰った『オオカリヒメ』の離厩の話が具体的にってきた昨年 8 月初めの頃であったと思うが、平石主将から『北銀』に乗ってみないかと誘いを受けた。『北銀』は右前

肢の骨瘤の故障で、ほとんど新馬扱い。『オオカリヒメ』や『北将』に乘れなくなることでもあり、幾分かでも基礎的調教のお手伝いができればと考えて乗せて貰うことにした」。半澤教授の乗馬姿は想うだに懐かしい。教授は『北銀』に筆を進める。

「第一印象は、馬格も馬品も良く、き甲は適当に高く長く、わりに幅もあり、肩甲骨の傾斜も障害飛越に適している様に見えた」。驚くほど精密な観察と描写だ。そして、

「性質、性格は非常に素直でおとなしく、人なつこい馬で、多分可愛がられて育成されたものと思われる。少し稗威が足りない感じがするが、ゆっくり調教すればいい総合馬になる性質を持っていると感じた。(略) さて、乗った感じは、最初は脚に敏感でなく、ハミ受けが悪く、口にあたると嫌がって頭を揚げ反抗し、口が敏感のように思われた。然し非常に素直で余り興奮することがなく、少々荒い扶助を使っても常に沈着を保ち、御し易い感じを受けた」と親切にウマの反応を語り継ぎ、最後に教授の持論を次のように伝える。

「運動は先ず第一に半停止(the half・half)の扶助を覚えさせること、次に頭を下げ顎を伸ばすこと、できるだけ大きく歩かせること、後肢の踏み込みを良くすること、四肢を揃えて正しく停止すること、押し手綱に従うこと、内方脚に一層敏感に反応すること、蹄跡を離れて真直ぐに歩かせること、正確な図形上を歩かせること、歩度転換をスムーズに行うこと、口とのコンタクトを常に軟らかく同じように保つこと、絶対に勝手なこと(騎手の意に反した)をさせないで騎手の命令に従うこと、などだが、何れもそう簡単ではない」

ウマの調教に必要なことはすべて含まれている。部員はこれを箇条書きにして馬場に大きく掲げ暗誦してウマに乗れば、どんなウマでも良くなること間違いなし。

続けて昭和 60 年の部報に半澤教授は「一年後の北銀号」に乗った印象を記している。

「この一年間に「鎌田、千葉両君に乗って見て頂いて、注意する点、不十分な点を教えて頂く機会がありました」という。こんなケースはめったにない。その結果――、

「脚に対する反応が悪いから、脚の扶助に敏感になる様にする、常歩ももっとゆったりした濶大の歩様で歩くよう、拳と口のコンタクトをもう少し強くしては等の助言を頂いた」と記す。そして前年に記した調教の項目を一つ一つ確かめるようにして一年間の成長を見、「国体の指定馬の資格に合格し、国体に出場出来るようにしたい」と結んでいる。

- ・ **北 玲 号** 昭和 56 年生まれで、60 年度部報によると、新馬から調教したらしい。長屋清隆(S53 卒)が記す。「入厩してから雪が降る頃までは、専ら馬場内での輪乗りを主体にして運動し、三種の歩様の発信及び停止の扶助を号令とともに行った」。新馬の調教としては正しい。

やがて障害を飛ばすようになる。「この頃はバーのコンビネーションを、距離や構成をいろいろ変えて練習していた。主に駈歩でアプローチしてゆったりと飛ばせるようにし、回数は多くて 20 回程度、高さ・幅とも 90 ㌢くらい。」これらも全て正しい。いいウマになる。

- ・ **北 雷 号** 昭和 60 年度部報で「スーパーボーイ号」とともに「新馬紹介」であげられている。その後 2 頭についてはあまり調教報告もないから、早い時期に離厩したのかも知れない。
- ・ **北 凜 号** 馬歴は昭和 57 年生まれだから、60 年度部報に載る写真はまだ 3, 4 歳か。芦毛とあるが白い毛には変わってはず、一見、青毛のように見える。調教が成功したか失敗したか不明だが、平成 4 年の「太秦杯・半澤杯 馬場馬術」で 5 位に馬名が見える。部内競技には出ていた。
- ・ **北 駿 号** 昭和 58 年生まれで若ゴマのうちに入厩した。平成 3・4 年の競技成績が平成 4 年度の

部報に残っている。ムラがあるが優勝も何度かある。能力はあったウマだと思う。(編集注＝同馬の戦績には「1990(H2)/10/22 第45回福岡国体総合馬術 堀崎敬史(H3 卒) 7位入賞」の記録もある。)

このウマを担当した祝前伸光(H5 卒)が部報に記している。「平成4年の後半、北日本学生大会が終わってから精彩を欠く。乗馬技術や調教云々というよりも、自己の精神をベストの状態にすることが出来なかったことに敗因は集約される。北日本までは、拙い騎手をしばしば窮地から救ってくれたが、それ以降は騎手の心の乱れが伝わったものか、二度と救いの手を差しのべてくれることはなかった」。部報に掲げているこのウマの写真は、いただけない。「部報」は年に一度の記録。品位とモラルは・・・。

- ・ **北 瑛 号** 「ギャロップ」という愛称でも分かるように、馬場で乗ると「跳ねる臆病者」。障害は苦手で馬場競技のウマとして調教していたが、これと云った成績はない。
- ・ **グレンエトワール 号** 昭和61年生まれで平成2年に入厩している。馬術部が最初から調教したウマらしい。その調教に失敗した。平成4年度部報に池田直弥(H5 卒)が騎乗報告を記す。

「明らかにおかしくなったのは6月末、ノーザン大会での二回走行の経路回りのときだった。それまでは、たとえ踏み切りが(障害に)近くとも、まっすぐアプローチを取れなくても飛越していた馬が、5番目の障害で止まってからは、どのような障害でも、自分から向かっていかなかった」

ウマにしてみれば「踏み切りを合わせてくれない」「障害へまっすぐ誘導してくれない」が重なって、「こんなこと、やっていられるかいッ」とサジを投げたのではないか。
- ・ **パシオン・エム 号** 「真っ黒い馬体に、ワイルドな容貌。北大の中でも『かっこいい馬』として注目される——」。平成4年度の部報には、調教のことより、ウマそのものを面白く紹介している。パシオンはスペイン語で「情熱」。その名の通り情熱的で「人なつっこい」ウマではなかった。よくケガをする。治療は嫌い。獣医さんはこわい。「でも本当は何をされるのか分からないから、ドキドキ緊張してしまう」。そして「こういうことをするんだよって、ちゃんと教えてやればじっと我慢する」。調教もまさしくこれと同じなのだが——。
- ・ **明日檜 号** 平成4年度の部報に、やっと明るい記載を見つけた。

「明けて16歳。部内ではギャランに次ぐ長老ながら、若い者にも負けちゃいません。去年は北日学の二回走行で権利を獲得し、見事初の全日学出場を果たしました。道馬連ではその成績が認められ、本年度の優秀馬に認定されました」。まさに「あすなろ」であった。
- ・ **ファストバロン 号** 菊花賞7着、その後調教中、右の前つなぎ骨折、骨折部をボルトで固定したものの、競走馬としての使用は無理との判断で引退。乗馬として再出発という事で北大に入厩したのは平成に切り替わった年、真夜中であつたという。「きかない馬」という印象で、日々の手入で蹴られた咬まれた事も何度か。平成4年度部報に横幕宏幸(H5 卒)が記す。

「性格がきかないウマだがバネはある。飛びはパットしないが人に従順である。よく言われる学生向きの馬とそうでない馬。そんな馬達を学生レベルの力で『良い馬』にするにはどうしたら良いのか、一年間バロンと付き合ってみて考えてみたけれど、どうも考えが纏まらない」。馬歴を見ても、乗馬調教の難しさが分かる。
- ・ **北 遙 号** 平成3年の夏、札幌競馬場から入厩した。6歳の「走り盛り」だった。横山勉(H5 卒)が調教報告を記している。

「障害で初めて飛ばば、突っ走るという状態だったが、飛んだ後、騎手に注意を向けさせる調教を心掛けた。それでも練習馬場では調子よくいっても本馬場に入った瞬間に緊張してパニックになる。障害飛

越以前の問題だった」。競走馬上がりの馬の調教の難しさだろう。

- ・ **ハギノレジェンド 号** 昭和 62 年生まれ、競走馬を経て北大に入った。競馬ではそこそこの成績だったが乗馬としては新馬同然。松原貴史(H7 卒)が平成 4 年度部報に新馬紹介として記す。

「北大に来た当初、どんな暴れ馬がやってくるのだろうと思いましたが、馬運車から降り、落ち着き払った様子で、馬場を常歩してる彼を見ると、安心してしまいました。新馬はもっと扱いづらいものだという勝手な思い込みがあったが、なんておとなしい馬か」

前にも書いたが、この「思い込み」が一番の危険。ウマほど敏感で記憶のいい動物はなく、人間を瞬時に感じ取ってしまう。その人間が調教しようとしても、ウマの記憶は消えない。

- ・ **北神威 号** このウマは平成 3 年生まれて馬術部の先輩鎌田さんの育成牧場で育ったらしい。競走馬を経て北大にきたが、鎌田さんが調教したとは限らない。平成 9 年度部報で金丸鉄平(H12 卒)が新馬紹介に記している。

「1997 年 10 月、門別はフアンタストクラブの鎌田さんのもとを離れ、北大にやってきた。初めはやはり新馬らしく、馬場で曳いているときも乗っている時も落ち着きがなく、ちょっとしたものにも驚いていたが、それも二か月目ぐらいにはだいぶ落ち着くようになり、四か月近くになる最近では馬場放牧に加わり、他の馬たちと仲良くじゃれ合っている」

馬術部が入厩したばかりの新馬をどう扱っていたかよくわかる。やがて北大のエースに。

- ・ **北 蒼 号** 前の北神威号といっしょに新馬として紹介されている。浅野知弘(H11 卒)が記す。
「平成 10 年 3 月 28 日、東京競馬場から函館に荷物を運ぶついでに馬運車で 1 頭の栗毛が運ばれてきた。神経質そうな 7 歳の騙馬、大きくて右のまぶたに少しかかった白いサクと右目の白目が印象的な馬だった。まだ寒さの残る札幌では、いかにも寒そうでであった。馬場も障害もそこそこでき、調教も順調。主戦馬になるのもそう遠い日ではないようだ」

× × × ×

主戦馬の交替期が近づいて、離厩するウマも次第に増える。北大で感心なのは、いちいち離厩式を行って皆で盛大に送り出していること。離厩の写真は部の宝になっていくことだろう。

§ (その八) 新居の居心地

◎ 北大のウマたち (3)

平成 11 年 3 月、北 24 条に馬場、厩舎などが完成。工事を施工した市役所から引き渡しを受けるが、引っ越してきた「北大のウマたち」はどう感じていたか、その後の調教や試合成績を見れば、おおよそ「居心地」が知れる。

この頃、入厩・離厩が頻繁に行われ、入厩してきた時の馬名と北大が新しくつけた名が違っているの、平成 10 年度部報に載った「馬匹紹介」を見ておく。

- ・ **北 牙 号** (**ファストバロン**) : 気難しい馬。体を触られるのが嫌い。手入れの時に咬む・蹴る。
- ・ **北 凌 号** (**ハギノレジェンド**) : 目がクリツとしてかわいい。良家の坊っちゃん。その分繊細。
- ・ **北旋風 号** (**トルネードダンサー**) : 飼い付け前に馬房で大暴れ。壁を蹴って穴を開けたり・・・。

- ・ **北 鈴 号** (スズロード) : 飼いを三分の一くらい口からこぼす。わんぱくだがそこが可愛い。
- ・ **北 蘭 号** (アーネストヒダカ) : 細く長い首に気品漂う。夏を迎える前に不運なケガをした。
- ・ **北 祥 号** (シンコウスピリット) : 可愛いウマ、人気は一番。障害は止まらないがよく落す。
- ・ **北神威 号** (ローズ) : バランスのいいウマで飛越は軟らかい。前肢もよく上がって素質は十分。
- ・ **北桜冠 号** (オーカン) : 頂きもののウマ、片目が見えない。以前はかなりの馬だったとか。

以下、「北」の字を付けていないウマが3頭。「メジロゲネシス」「ドリームグリーン」「マチカネヤノゴトシ」。それぞれ「入厩報告」があり、代わって「北帝号」「北彪号」の「離厩報告」と「フライト死亡報告」を載せている。

では、後半に馬体の写真で紹介した（*編集注=写真省略）「北大のウマたち」に戻る。

- ・ **北 鷲 号** 1992年6月、札幌競馬場から入厩した。入厩した頃はチャカチャカして落ち着きがなく、馬房では前がきを覚えて田んぼのようにしてしまう。障害を飛ぶ能力はあるようだが、調教を担当した部員が「平場の騎乗」と「障害飛越の騎乗」を別物と考えていたらいく「障害を恐れないようにすれば」とばかり考えて失敗した。いうまでもなく平場での騎乗を十分にこなして障害に向かわなければ、ウマとの信頼関係は保てない。やがてこのウマは離厩する。
- ・ **北 牙 号** 旧名の愛称「バロン」で通っていた。その名のとおり「男爵」の気品がある。全日本学生に出場した経験を持つ。しかし、その後の調教に失敗した。平成9年度部報に角堂豪（H11卒）が記す。

「バロンが精神的にも馬体的にも難しい馬であることなどで焦っており、馬をハミ受けさせたと勘違いしてむりやり屈頭させたり、速歩をしたり、自然障害を飛ばせたりと、馬の気持ちを考えずに騎乗したこともあった」

この「ハミにかかる癖」を直すのに時間がかかった。「馬場では主に放棄手綱にし、自由速歩や自由駈歩をした。これにより馬の口を楽にして運動することができた」という。成績を見ると「ノーザンカップ」の障害飛越で辛うじて17位になっている。それから一、二度、下位での成績がある。もっと飛べるウマだと思うのだが――。

- ・ **北 凌 号** 平成9年度部報の「調教報告」に、亀山巖(H10卒)が三年目のシーズンを振り返って絶望的なことを記している。

「全く足りなかった。見通し、計画性、向上心、集中力、すべてにおいて足りなかった。長期的な計画無しに毎日の練習をただなんとなく終える。調教に方向性がなかった」

まるで自虐的な表現である。しかし、学内での大会の中障害飛越競技で優勝したこともあるし、そのほかの大会の総合馬術競技で「5位」に入賞したこともある。やはりウマを信じて試合に臨むことが出来なかったのではないかな。自信を取り戻せばいい成績を残せたはずだ。

- ・ **北旋風 号** 平成5年9月に入厩し、8年10月に馬運車横転の不運な事故に遭う。この事故で右前ひざの肉がえぐられ、一週間で治ったものの、代わって左前肢内側の骨瘤が大きくなった。不運続きである。冬が過ぎて馬場での練習ができるようになったが、調教には遅れた。

良い馬質だったのに事故の後遺症があったのか、どの大会でも15位前後の成績を上げるのが精一杯で、実に惜しいことをした。

- ・ **北 燕 号** 最初から練習馬として育てていたようだ。平成9年度部報の調教報告に河合由枝(H8

卒)が記す。

「練習内容で注意したこと。障害に向かう、飛越時、リカバリー、直線上、回転時などに分けて、どの段階でどのようなことをしなくてはいけないかを注意していく。馬への注意が足りないときは注意を促す。三年目レベル以上の練習内容は、コンビネーションから駈歩飛越へ」。これで申し分ない。さらに続けて「どの馬でも、練習方法を工夫し的に絞って注意を行えば、初心者から上級者までの練習に使えると思う。それぞれの練習に応じた馬の状態を作ること、馬に対しても悪影響を及ぼさないように注意すべきだと思う」と付け足してこれでも申し分ない。練習人馬のいい調教役になれると思う。

- ・ **北 帝 号** あのとウショウボーイを種馬にするのだから走る血統に問題はない。障害の調教をどうするか。担当の中田一紀 (H9 卒)が平成 9 年度部報に記している。

「新馬に障害を馴致するときに、反抗されやすい障害がいくつかある。乾濠であったり、バンケットであったり、カマボコであったりいろいろ。逆に衝立や門扉ではあまり反抗されたことがない。馬にとって飛びやすい、飛びにくいのは色彩だけでなく、どこから飛べば良いのかははっきりしているのが重要で、「ふみきり」を見つけやすい障害とそうでない障害があるのだと思う。だからそれを、騎手が指示してやるのか、パターン学習によって覚えてもらうのか考える。自分たちの技術では後者だと思う」

これだけ確りした理論があればウマも良くなるはずだが、たいした成績を残せなかったのは、理論の先走りか、あるいはウマの名前負けだったのか――。

- ・ **北 祥 号** 馬体を写真で見ると、乗りやすいウマに見える。平成 11 年度部報の調教報告に森田崇之(H13 卒)が記す。

「障害飛越に関して心掛けたことは、フラットワーク同様、馬の動きを邪魔しないで飛越させることであった。北祥は飛越においては常に前向きな馬であり、どんなに踏み切るポイントが合わなくても、天性ともいえるバネで障害を克服していく馬である。よって自分がすべきことは、しっかり推進して良いリズムで障害へ向けることであった。しかし、北祥は脚反応に対し、かなり鈍感であり、技術のない自分にとって、推進は日々困難を極めた。そして、推進しようとする気持ちが先走ること、かかとを上げたり、姿勢を前傾させて推進しようとする癖が身に付いてしまうのに時間はかからなかった。基本姿勢が欠如した推進ほど悪循環に陥っていくものはない。」お終いはやはり自己反省であった。

- ・ **北 獅 号** 能力の優れたウマであった。それが途中で壊れる。平成 9 年度部報に小谷友也(H11 卒)が失敗談を記す。

「二年連続全日学に出場していたのに、三年連続を果たせなかったのは、ひとえに自分自身の実力不足が原因だ。もっと具体的に、しかも一つに絞るとしたら、推進不足以外の何ものでもないと思う。十分な推進ができないために、普段のフラットワークでも試合の障害走行でもウマに信頼を与えることができなかった。そしてもう一つ原因を挙げるならば、自分に自信を持てなかったからだろう」

これでは自己撞着、堂々巡りにすぎなくなる。解決方法はただ一つ、練習するしかない。

- ・ **北 優 号** 平成 9 年度の部報を見ると、黒崎雅人(H7 卒)が入厩時から二年連続で調教に当たったことが分かる。黒崎は二年目の目標を「障害と場所の馴致に置く」と記す。その経過は――。

「半澤杯で障害の試合にデビューした。一鞍目は私が乗った。レンガ障害にきちんと向けられず反抗。つづいて後輩の鶴見(H8 卒)が、なんと「新人新馬」で優勝し、見事「小池杯」を獲得した。本来なら北日学の大会が終わるとウマ担当の任期は終わるのだが、現役に無理を言って秋季自馬大会まで延長してもらった。どうしても他の馬場で障害に出てみたいという希望があったからだ。「場所の馴致」

の結果を見たかった。「新人・新馬」の一鞍目に後輩が出場し、二反抗・四落下で帰ってきた。私は二鞍目で四落下で帰ってくることができた」

場所の馴致は、一応成功したと見ていい。ただし無理矢理飛ばした風に記しているから、このあとに嫌な記憶を残さなければ良いのだが――。

- ・ **北 鈴 号** 平成 11 年度部報に永田拓郎(H13 卒)が面白い調教報告を記している。調教報告と云うより自己反省報告なのだが――。

「ビデオをたくさん見て、上手な人と自分のどこが違うのかを考えた。自分なりに乗り方を変え、まず騎座をしっかりとし、上体・腰・座骨・大腿・下腿・蹬を三歩様（常・速・駆）で安定して乗れるように心がけた。しかし馬に満足な推進ができず、馬の動きをよく感じて乗ることに注意をしました」。さらに「馬を前に出すという感覚を得てから、それを自分なりに三歩様で行い、馬のリズムに合わせることを心がけ、ようやく障害でも走られないで跳べるようになりました」と続ける。

これではまるで乗り手の調教報告ではなかろうか。

- ・ **北 蘭 号** 昭和 58 年生まれだから、北 24 条の新厩舎に移った（平成 10 年）頃は相当の高齢である。そこを考えて亀山巖(H10 卒)が「調教報告」を記している。

「彼女（牝馬）に対して調教など、何も必要なかった。彼女の経路走行のペースは遅い。がそれでいいと思う。無理に押さえようとせず、乗り手がそのスピードに慣れること。ただし障害前のバランスバックは忘れずに。騎手がきちんと体を起こせば、彼女はきちんと飛んでくれる。練習では絶対反抗されないこと。騎手のレベル以上の障害を無理に試し、馬を壊すことのないように。また、フラットワークにおいても、馬の反応を謙虚に受け止め精進すること。馬の状態、反応が悪いのはすべて騎手のせいである。彼女は何でもできる。最後に馬体管理を徹底すること。彼女は高齢なので、オーバーワークには気をつけること。筋力トレーニングを怠らないこと。また疝痛持ちであることを忘れずに管理すること。現役には彼女から多くの事を学んでもらいたい。たくさん教えてくれるはずだ」。

懇切丁寧で、分かり易い後輩への指導。ウマにとっても幸せだった。

- ・ **北 彪 号** ニュージーランド産で写真から見る馬格は良い。先輩の世話で平成 9 年に中央競馬会から入厩したが、血統の「父母ともに不詳」が気に掛かるころ。入厩した年の部報に、池田智義(H10 卒)が新馬調教報告を記している。あまり芳しくない。

「春になってまず横木からまたがせようと思い、ブロックで小さいクロスを一つ作り常歩で向かって難なく通過。これはそこそこいけるかなと思い、速歩でやってみると馬はすごい勢いで走り、またげるほどのものを遠くからバカッ飛びし、これはダメだと思った。またフラットワークでは右姿勢が大変かたく、駆歩は巻き込んでかかってしまう。そのため、まず駆歩を巻き込まないでゆっくり一定のリズムでできること、右を柔らかくすること、障害はコンビネーション以前にたった一つのクロスや小さなカマボコ型の障害をゆっくり飛越することから始めた」。

結局、結果は離厩も早かった。

× × × ×

北 24 条の新厩舎に移る前の平成 9 年度の部報に、移転準備とともに苦労を重ねた主将の池田智義(H10 卒)と、亀山巖(H10)、函館の水産学部に移行する下田素子(H12 卒) が「卒部にあたって」を書き残している。何年、何十年経っても「ウマキチ」は変わらない、と思わず漏らしたくなる記述。

- ・池田智義：「一年目に入部したとき、第一印象は『酒、作業、馬きちがいの人々』だった。二年目、自分も徐々に『酒、作業、馬きちがい』になっていき、学校は無限に遠ざかっていった。三年目、自分自身の馬に乗ることだけで精一杯だった。四年目、馬術部と自分が一体になった一年だった」。
- ・亀山 巖：「自分の人生において、馬と生活したこの四年間は最高のものであった。今までに感じたことのない愛情、反対報酬を全く期待しない純愛を、自己の内に見ることができたから。素晴らしい仲間を知ることができたから。苦しく、また満足できたから。でもその満足と同じくらい、サボったこと、手を抜いたこと、不十分だったことに対する悔恨の念が」。
- ・下田素子：「みんなと一緒にいろいろと頑張ってきたのに、途中でバイバイというのもつらいものがあります。今思えば、一年のころとか何度もやめたいなあと思ったりもしたし、何でこんなにバイトばかりやらねばならないのかなどと文句が多かったような気がします。でも、朝の練習で馬に乗って、馬を思うように動かしたら、すごく楽しくなるし、馬（特にイーリー君）がご機嫌だと私も嬉しくなって、続けてて本当に良かったと思ったものでした」。

§ (その九) 新厩舎の新しいウマたち

◎ 世代間ギャップ

平成 14 年度部報の巻頭言に、定年による退官を次の年に控えた市川瑞彦部長が「北大馬術部は『時代間ギャップ』を克服できるか」と題する一文を寄せている。筆者（生田）と市川部長は馬術部の卒部に 4 年の差があるだけだから「ギャップ」はない。それどころか、ともに北大の黄金時代を築いた間柄である。その絶頂期に「全日本学生王座決定戦」俗に言う「王決」に彼等は優勝し「日本一」になっている。筆者が北大を卒業して 3 年後の秋だった。だが前年から主将を務めた市川は不幸にも練習中に病に倒れ闘病中で、王決には参加できなかった。優勝トロフィーを持って凱旋した選手たちが病室に前主将を訪ね、「市川！ やったぞ」と報告する様子を筆者は記事にし、北海道の読売新聞の紙面を飾ったものだった。この「王決」に出場した昭和 39 年度卒の恩田正臣が、平成 13 年度部報に「全日本学生王座決定戦に優勝した頃の馬術部」と題して思い出を綴っている。一部を紹介する。

「学生王座決定戦は東北・北海道地区の予選があり、帯広畜産大学が昭和 35、36 年と勝ち進み、そのまま全日本学生王座を二連覇していた。37、38 年は北大が予選を勝ち、全日本学生王座に出場した」。試合はトーナメント方式で、6 名が 1 頭ずつ同じ馬に乗って障害を飛び、減点数の合計の少ない方が勝ち進む。2、3 頭は難馬がいて、それが勝負を決することになる。

「その馬の前段に乗るか後段に乗るか、大きなかけひきの要素である。北大は玉澤・志水・原・清水・岡田・堀川・恩田のメンバーで試合に臨んだが、素晴らしかったのは前段でも後段でも、その馬なりの能力を発揮させて、ベストに騎乗したことである。その中で堀川君と私が全試合で勝ち点をあげ、優勝校から選ばれる最優秀選手候補になった。結局全勝同士で対戦した決勝戦で大喰いした私が結局選ばれたが、チーム全員が優秀選手だったと今でも思っている」

× × × ×

さて、冒頭に記した市川部長の「世代間ギャップ」に戻る。巻頭言は次のように始まる。

「世代が異なるとコミュニケーションがスムーズに行われない、とはよく言われることである。最近ではそれがどんどんひどくなり、大学でも学生間で二、三年も違えばもう話が通じないなどと言われる。北大馬術部でも OB と現役、OB 間での『世代間ギャップ』が私は最近気になっている」。市川部長はそう言って寮歌「都ぞ弥生」の歌い方を例にとり、世代間の違いを云う。そして「年齢がギャップを生む要因とも言い切れない。むしろ、時代環境の違いがより大きいだろう。事実、共通体験があれば、年齢が離れていても実にいい付き合いをしている人もいる」という。どんなに時代の環境が違っていても、「ウマに乗る」「ウマを育てる」という共通体験があれば、世代間ギャップも超えられるのではないか、と言っているようにも思える。そして最後に「我々は時代が異なっても『同じ釜の飯』を食ってきた仲間だし、情報を広く公開し、時代環境の違いにも思いを馳せて胸襟を開いて話し合えば、『世代間ギャップの問題』は超えられると思うが、 どうだろう」と問題提起している。

◎ 新しく入ったウマたち

北 24 条の馬場・厩舎の計画から市による施行、その引き渡しまで、すべてやり遂げたのが市川部長の在任中であった。平成 15 年度の部報「市川先生退任特集号」で、斎藤善一前部長は「まれに見る名部長だった」と絶賛する。その斎藤部長も名部長であった。

市川部長の在任中の業績は枚挙に暇ないが、そのなかの一つ、新厩舎に加えた新しいウマたちを、平成 11 年度部報第 45 号から、後半に掲載したウマの写真とともに集めて見る。（＊編集注：写真略）

- ・ **北 陽 号** （ドリームグリーン）： 新厩舎に移る直前の 1998 年 7 月の入厩。去勢してから新馬調教した。金丸鉄平(H12 卒)がその調教報告を記す。

「3 歳馬で先輩の中田さん(H9 卒)が初期調教を担当し、その夏、私が乗ったが、最初は速歩・駈歩で一定のリズムで走ることであった。競馬で走っていないせいか、焦ってどんどん速くなったりすることはめったになく、その点では乗りやすかったが、そのかわり一生懸命になることもなく常に一緒に遊んでいるというような印象を受けた。障害に関しても、クロスと小さなものの馴致を少しずつやっていたが、怖がるようなところはなくむしろ興味を持ってやっているという感じ。そのため最初のころは、物見をしない神経の太い馬なのかと思っていたが、実はものを見ても気にしないのではなく、周りにあるいろんなものに普段は気付いていないというだけで、それまで何ともなかったものを急に怖がりだすような姿を、シーズン中何度も見かけた。もともと気の強い馬なのでそういう時は人の言うことをなかなか聞かず、人間の無神経な接し方で馬の性格がどんどん変わっていく新馬調教の恐ろしさを感じた」。

新馬調教が乗り手にとっていかに勉強になるか、身をもって知らされたことだろう。

- ・ **サラマンダー 号** ： 武井亮(H16 卒)が入厩報告に記す。

「S53 年卒の本城先輩の紹介で、ウッドバインパトリックと共に千葉の中央競馬会競馬学校から平成 12 年 3 月に入厩した。18 歳と高齢で小柄だが、大変おとなしく乗りやすいので部員たちのために活躍してくれると思う」。厩舎にこういうウマが居るということは、新人や、対外試合を望まない部員たちにとって幸いであった。

- ・ **北 彗 号** (メジロゲネシス) ： 北星乗馬クラブより入厩してきた。 尾崎哲浩(H12 卒)が調教報告を記す。

「乗馬クラブから入厩したということでもあり、初期の調教は施されていたようだが、まだそれほど調教されておらず、新馬という印象が強かった。ただ、初期調教がそれなりにしっかりしていたので、馬場の調教に関してはとてもスムーズにいったと思う。問題は馬の性格にあった。背中に負担がかかる」と我慢できずに跳ねてしまう。駈歩で誤って背中をたたいたとき、障害で馬に無理がかかったときなど、よく跳ねられて落馬した。馬術部の馬は常に上手い人が乗るわけではない。この馬は、上手な人が乗れば非凡な能力を見せていたが、学生としては、誰が乗っても飛ぶという馬が理想で、その意味でゲネシスは自分たちが求めている馬とはかけ離れていた」。

これは半分「落馬の言いわけ」にすぎないのではないかな。

- ・ **メロンパワー 号** : 北 24 条の新厩舎ができた直後の平成 11 年 4 月に、札幌競馬場から入厩した。新顔の一番乗り。山本裕己(H14 卒)が入厩報告を記す。

「メロンは駈歩になると非常に(ハミに)かかる馬で競馬場の乗馬クラブで一般のおばさんを落馬させて骨折させ、それがメロンの離厩に拍車をかけて、うちに追い出されてきたようです。北大に来てからのメロンは、下級生の練習馬として予想以上に活躍し(こき使われ)、みんなにかわいがられ、すっかりおとなしくなりました(やつれました)。これからも練習馬として頑張ってください」。

これも広い厩舎と馬場のおかげ。

- ・ **北 斗 号** (ユウログレイ) : 北斗という懐かしい馬名だ。あの最初の「六頭のウマ」にも国体馬から北大に引き取られるまでこの名の馬もいた。平成 13 年度部報の調教報告(堀内太郎(H15 卒))では、このことの説明もされてないが、ふと時代の流れを思わせる。その調教報告に言う。

「乗馬クラブメインフィールドから来た。よく調教された古馬で、調教報告と書いたものの、調教したというより馬に勉強させてもらったという感じ。したがってこの場ではこの馬から学んだことや、この馬についてわかったことを書こうと思う。

北斗号は障害をやると興奮しやすく、障害に向かって突っ込んで行ってしまうところがあり、またハミにかかりやすく、のめりやすいため、最初の頃は走られてばかりで、どうやって抑えようか、どうしたら走られないか、ということばかりが頭にあった。そのため、手綱ばかりきつくなり、馬は背中を使わず、後肢の踏み込みはいつも甘い状態の運動を続けてしまった。さらに、障害直前までコンタクトを保っておけない、先飛びをしてしまうといった悪い癖も加わって、幅のある障害を拒止するようになってしまった」。

まさに反面教師。大会に出て「散々な結果に終わった」と記すのはやむを得なかった。

- ・ **リッチステート 号** : この先は「北」の字にもなっていない。それほど在厩期間が短かったのか。

平成 13 年度部報に木村滋之(H16 卒)が調教報告を書いている。調教というよりこれも反省の弁。

「馬はもうベテランで、馬場も野外も障害もほとんど問題はなかったようだ。馬場では肩を大きく動かしていい速歩をするので点数は取れるはずだが、本番になると少しハミにかかり気味になり、うまく受けとめられないと運動がバラバラになってしまう。野外では馬がハミにかかってしまうのでスピードコントロールが難しく、北日本学生では速いまま飛び降りバンケットに向けたため拒止されてしまった。障害では、馬が近くから踏み切れているのに乗り手が障害前で追ってしまい、馬のリズムとバランスを崩すことがあった」。

- ・ **ファンキーバルブ 号** : 在厩期間が短かったのか入厩報告も調教報告も書かれていない。
- ・ **ヤスノインデアン 号** : 平成 12 年 12 月佐賀競馬から入厩。鹿毛、6 歳、騙馬。吉川幸江(H15 卒)

が入厩報告を記す。

「性格は大変おとなしく、人間に対して従順で、学生でも扱いやすい馬だと思う。なぜか彼はウマが苦手で、馬場にたくさん馬がいて走り回っていたりすると心臓はばくばく、キャーキャー言ってます。放牧でも他の馬と一緒に出ているよりもひとりでボーッと草を食べている方が好きな馬です」。

- ・ グリーンザクロス 号 : グリーン牧場から頂戴したウマ。加藤幸作(H15 卒)が入厩報告を書く。
「少し小さめで亀甲が低い、筋肉の付きはよく、基本的に素直なウマ。本格的に運動を始めていないが、少し肢を気にして動きがぎこちない感じがする。学生向けの性格と思う」。

- ・ ウッドバインパトリック 号 : 平成 13 年度部報の入厩報告(高島渉(H16 卒))によると「脚元に多少、不安を抱えている。今シーズンは無理しない予定。能力はあるので今後の活躍に期待」とある。

ウマの写真はないが、13 年部報に、永く親しんだ北祥号(シンコウスピリット)の離厩報告と共にシュネル号と北楓号(カッティングダーク)の離厩報告が載っている。シュネル号はメインフィールド乗馬クラブへの離厩、北楓号は 2 年在籍したあとの離厩だった。

× × × ×

それにしても、この豊富なウマ達はどうだろう。広々とした新しい厩舎が出来てから、次々とウマが入る。中には飼育管理するのが精一杯で、調教するまで手が回らなかったウマも多くいたのではないのか。昭和 30 年代の、あの「六頭のウマ」と農耕馬上がりのウマたちを育てた時代を思うと、まるで夢のような話だ。

その「六頭のウマ」時代に馬術部を過ごし、何十年か経って「まれに見る名部長」を務めた市川部長は、その間をどう思ったのか。平成 15 年度部報「市川先生退任特集号」に、本人は次のように記す。

これは「十年前の斎藤前部長送別パーティーの挨拶原稿」だという。

「(前略) なぜ私が大変だなあと感じたかと考えてみますと、先程申しました点に加えて、北大馬術部の歴史と伝統があると思います。歴史とか伝統とかいうものも、煎じ詰めれば、人と人との連なり、つまり連鎖、つながった鎖、であると思います。その鎖のひとつひとつに、大袈裟に言えば、若き日の人生がぶら下がっているわけですし、その鎖は大変に重いものであるわけです。一方、鎖の端には毎年新しい鎖が現役諸君の卒部によって絶えることなく、つくられているわけです。部長としての役目としては、最小限この現役と先輩諸兄の結節点について、この鎖の一つとなって本当によかったなと思えるように、手助けをするということかと思います」。

北大馬術部は戦前からの長い歴史をもつ。「六頭のウマ」の時代から、今年平成 24 年で 60 年近い歳月となる。市川部長はまさにその「中興の祖」であった。「北 24 条厩舎」に入り、また出るウマは今日も続く。ウマも人も、伝統の中に生きつづける。

市川部長の後任は、昭和 56 年の北大馬術部主将を務めた井上京。工学部農工土木の出身。学内でも教官から代々の部長を輩出できるのは北大でも「馬術部」ぐらいか。これも伝統の強みといえる。

§ (その十) 新厩舎への集合

◎ 北大のウマたち(4)

北 24 条の新厩舎が出来て入厩、離厩が繰り返され、北大のウマたちの顔ぶれも入れ替わった。ウマた

ちはこの異動をどう感じていたか。敏感な動物だから、神経を使っていたことは想像に難くない。

昔々、筆者（生田）が大学二年の頃、皇居内のパレス乗馬クラブで開かれた「東京大会」に自馬で出場したことがある。愛馬はその頃の名は「ミストクシマ」、後の名「北標」であった。

出場馬の厩舎は今の東宮御苑にあり、皇族たちの乗馬を移動させ、北海道や東北・九州など、馬運車でなく貨車で上京する出場馬たちの仮厩舎だった。レンガ造りの広々としたその立派な厩舎に一驚した。その驚きがウマにも伝わったものか、馬房に入ってもしきりに身を寄せて寂しがる。「この馬房に泊まって傍にいてやろう」と咄嗟に思った。この先は以前「記録と記憶でたどる自分史・学生期」にも書いたが、乗馬服のまま一旦大手門から外に出、ほど近い神田でしこたまニンジンを買ってジャンパーのポケットに詰め込み、皇居に戻る。大手門で門衛にわざとニンジンを見せ、「厩舎へ」と声をかけて馬房へ直行した。案の定「トクシマ」は鉄の柵に鼻をつけて待ちわびている。辺りに人のいないのを確かめて馬房にもぐりこんだ。それから一晩――。朝方起きて見ると、トクシマが長い顔を寄せてモグモグやっている。ハッと思ってジャンパーのポケットに目をやると、服はすっかりボロボロ、ニンジン是一本も残っていなかった。このあと不敬にも皇居の奥深く潜入し、その頃の東宮御所などを見て、衛視に見つかることもなく試合に臨んでいる。成績がどうだったか、記憶にない。

× × × ×

ここで言わんとするのは、敏感なウマたちが新しい厩舎をどう感じたかだ。キョロキョロ、オドオドしていたに違いない。その気持ちを察してやれば、ウマともっと仲良くなれたはずだ。

では、新厩舎に集合したウマたちの入厩報告・調教報告を、平成 14・15 年度の部報から見ていくことにする。

- ・ **サラマンダー 号** : 昭和 58 年生まれだから平成 14 年 3 月に入厩したときはかなりの高齢。飛越能力もやや劣るので離厩候補だったが、素直で扱いやすい性格、自由手綱でも安定してコンビネーションを飛ぶこと、誰が乗っても 1 フルクラスなら満点で帰ってくることなどから、一年間練習馬として残ることになった。担当の武井亮(H16 卒)が記す。

「この馬は競馬学校の先生が調教した馬なので、教えることは何もなかった。ただ、心掛けたのは①馬体の維持、②この馬の長所を維持すること、③下級生を効果的に成長させること、の三つだった。おおむねうまく行ったと思う」

たとえ一年間でもこういう練習馬がいたら、ずいぶんラクだ。

- ・ **エルグレイ 号** : 平成元年に生まれて 14 年 9 月に入厩しているから、まだら色から芦毛に変わり見栄えがする。入厩する前から馬名は知られていた。ただ、肺が悪く無理は出来ないとされていた。高島渉(H16 卒)が入厩後の調教報告を記す。

「つかまっているだけで飛ぶと言われたが、つかまっているだけでは飛ばないのも事実。ただ、ある程度馬を起こして待っていれば必ず飛んでくれる。この馬はとてもストライドが大きいので、ほかの馬と同じ歩数で行こうとすると多少窮屈になる。特にショートコースだと確実に窮屈になるので、一歩少なくしたほうが馬が楽な姿勢で飛べると思う」。

なかなか細かい目配りだ。

- ・ **北 翔 号 (シンコウブラウン)** : 平成 15 年 1 月に浦河高校から入厩する珍しい馬歴。右後肢

の腱を切り、跛行する欠陥を持つ。前野伸策(H17 卒)が調教報告を記す。

「腰に負担がかからないよう常歩で腰を十分にほぐしてやる必要があった。できれば反対姿勢の輪乗りなどをいればより効果的と思ったが、自分の技量では出来なかった。少し肩を張る癖があるので内方の拳を引き込まないこと、先行してしまわないこと、外方の壁をしっかりと意識するように乗った」。

後肢に欠陥を持つウマの調教に十分配慮している。

・ シーベスト 号 : 「平成 15 年 8 月、白井牧場からやってきた。競走馬時代 1 勝もできなかったが、7 歳とまだ若いのでその能力を最大限に発揮できるようがんばる」と前田晋也(H18 卒)の入厩報告。

翌年の調教報告(寺島良(H16 卒))は、「神経質なところがあってなるべくそれを出さないように馬の気分を悪くしないように心がけた」といささか心許ない。それでも「障害では無理はさせず、馬に自信を付けさせるよう低いのを多めにやった。練習での反抗は絶対させなかった。そして常歩飛越と、放し手綱で速歩・駈歩飛越をやって、人が飛ばせるのではなく馬が自分で飛ぶようにしていった」と記す。果たして望みどおり能力を発揮できたか ――。

この後に「離厩報告」として小阪梨奈(H18 卒)が記す。「12 月 9 日に北陽(ドリームグリーン)と一緒にモモセファームに行きました。北日本学生からの跛行が治らないことなどの事情から離厩することになりました。スズ(北鈴)とドリームの二頭ともモモセファームでかわいがってもらっていると思います。別れは辛い。スズこと「北鈴」はまだ紹介も済んでいない。

・ パワフルショット 号 : 平成 9 年生まれで 15 年 11 月に入厩している。小阪梨奈(H18 卒)の入厩報告。

「11 月 15 日、昭和 30 年卒の鎌田さんの紹介で、恵庭のすずらん乗馬倶楽部より入厩しました。競走馬としては未勝利でしたが乗馬として活躍してくれることを期待したい」。

鎌田さんが馬術部の世話をやいていたことが、部報の随所に見える。

・ 北 鈴 号 (スズロード) : 前に何度か出た馬名。平成 4 年生まれで 8 年 7 月に入厩している。大会に何度も出場している。平成 14 年度部報に加藤幸作(H15 卒)が調教報告、というより試合に臨む経過報告を記す。

「去年に引き続いてスズロードに乗り、今年はなるべく人と馬がしっかりと意思の疎通をしてなるべくいい状態で大会に臨めるようにと思ってやりました。この馬は結構精神的な波があって、休み明けなどは口を突っ張って人の扶助に反抗したりと、なかなかうまくいかない日もありました。やはりそのときに人が一緒になって喧嘩したり、いっぱいいっぱいになって荒い乗り方をすると、もうどうしようもなくなってしまう。そんなときほど準備運動から丁寧にやっていかなければいけないということに気付かされました」。

人馬一体とはこんなときにも言うのではないか。要は人は馬を馬は人をどう信ずるかだ。

・ 北 陽 号 (ドリームグリーン) : このウマも先に「離厩報告」を書いてしまった。平成 8 年生まれ、10 年 7 月入厩だから、明け 3 歳で入ったことになる。それから 5 年足らずで離厩。14 年度部報の調教報告(山口剛司(H15 卒))を読むと、もっと見えそうに見えるのだが。その調教報告に記す。

「主にやってきたこと。①後肢を良く動かす事、②ハミと脚との関係を作る事、③はこれからの課題として野外での馴致、④障害をリズムよく通過させること。最後に、今年は無理だという声の一部であったようだが、余力には出なかったが北日本学生にデビューを果たし、調教では 1 位をとり、耐久も

反抗はしたが帰ってこることができたので良かった。まだまだのびる馬だと思う」。

こんなウマなのに離厩とは、馬体に何かが起こったのか——。

・ リッチステート 号 : 昭和 59 年産で平成 12 年 5 月に入厩。14 年度部報に竹田敏宏(H16 卒)が調教報告を記す。

「能力が高く、よく出来上がった馬であることは皆がわかっていることであったが高齢馬であった為、馬体の現状維持ができるようになる事を目指した。(中略) 目的がはっきりしていくとともに、騎乗者の技術不足がいかに深刻であるのかもわかってきた」。

これも言い訳に終始する。読んでいてはがゆくなるばかり。基本的な騎乗練習不足か。

・ ウッドバイン 号(ウッドバインパトリック) : 平成 3 年ニュージーランド生まれ、14 年 3 月、サラマンダー号と共に競馬学校から入厩した。木村滋之(H16 卒)が調教報告を記す。

「もともと右前肢に繋靱帯炎をわずらっており、練習馬としては期待できないが、障害に関してはまず反抗することがない。が、口向きが悪く、特に右口が強く、馬体のバランスも右に傾きながら運動するので、左回転で外に膨れやすく、右回転では内に傾いてくる。そのため、普段のフラットワークでは右に寄せないようにバランスを真直に保って運動することを心掛けた。また、興奮するとブレーキがきかなくなるところがあり、障害の練習では飛んだ後、しっかり止めてエサをやるようにした」。

ここまですべて正しい。

・ 北 鳳 号 (ヤスノインディアン) : 平成 8 年生まれで 13 年 12 月に入厩してきた。木村滋之(H16 卒)が反面教師のような表現で調教報告を記す。

「僕には馬乗りとして致命的に欠けていたものがある。それはうまく言葉で表せないが、『負けん気の強さ』『馬に対して妥協しない姿勢』『厳しさ』のようなものであると言ったらおわかりいただけるだろうか。要するに僕は『へなちょこ』な人間であり、そのために今まで乗ってきた馬で何度となく失敗を繰り返してきた」

これはもう自虐的表現のようにもとれるが、実はその逆説を言いたかったのであろう。

後段になると「新馬調教においては、体を作り、扶助を教えるとともに、この上下関係を揺るぎのないものにしておくことが大切である」として「アメとムチ」の表現を例にあげる。

「あえて『上下関係』という言葉を使っているのは、『アメとムチ』のムチの方に焦点を当てているからで、本当は『信頼関係』という言葉を使う方が正しいのかも知れない。馬の調教においては褒めることが最も重要であり、そこから信頼関係が生まれてくる。最近では少なくなってきたように思えるが、エサをやる調教方法は馬を褒めながら調教していくという概念の現れであり、よく褒めながら地道に育てた馬は長く活躍していけると思う」

まさに思うツボであり、平成 15 年度部報に掲載したこの論文(全文 5 頁にわたる)は、「調教報告の見本」としていつまでも記憶にとどめておくべきだろう。

・ 北 隼 号 (メジロゲネシス) : 平成 5 年生まれでその 5 年後に入厩した。芦毛のウマだから馬体が白い毛に変わっていくのが写真に残っている。平成 14 年度部報に木村滋之(H16 卒)が調教報告を記す。

「この一年間、僕がゲネに騎乗してきた結果は、総合で北日本学生 7 位、全日本学生 29 位。結果から見ればデビュー戦にしてはなかなかの成績だが、どちらも調教審査では馬が緊張して集中せずにバタバタ、耐久では 1 反抗、余力こそ満点ではあるが 120 ㌔障害のコースを帰ってきたのは北日学の 1

回だけ。まだまだ不安要素は多く、とてもよい総合馬に育ったとは言えない」。

正直に反省している。よく跳ねるウマで、何人か落馬して病院に運ばれたという。これも調教の失敗だと反省材料にする。

その「調教」という言葉につき、翌年の部報で木村はこんな事を記している。

「調教報告という題名の文章を書くにあたって僕は、少し違和感を覚える。他大学の部誌においてこういった『調教報告』なるものを僕はまだ見たことがない。確かに毎年チーフが1年間を振り返ってどんなことをして来たか、どんなことで失敗し、どんなことで成功に繋がった、ということを綴ったこの『調教報告』はとても参考になるもので、けっしてこれ自体を否定する気はなく、むしろ『遺産・遺言』ともいうべき調教報告の載った部報は北大の宝であり、現役部員はもっと昔の部報をたくさん読んで勉強するべきである。(中略) だったらなぜ『調教報告』に難癖をつけるかと思うかもしれないが、僕にはこの『調教』と云う言葉が引っかかる。『調教』という言葉はすなわち馬が『生徒』であり人が『先生』という立場にあることを示す。チーフになった人間はこの馬を『調教』するんだという思いから無意識のうちに『先生』の立場に立ってしまう。こうなると、馬に乗ることが『練習』ではなくなり、ただの『運動』になってしまう」(後略)。

筆者もこの考えには一理あると思う。

§ (その十一) ウマとの仲

◎『調教』という事について

前の章で、平成16年卒木村滋之の「調教」という言葉に対する疑念を書いた。それに対する「回答」から始める。

その前に、平成16年度から馬術部長を務めている井上京(昭和56年主将・農工土木)が、16年度部報に「部長一年目の感想」を書いているので、一部を引用する。

「馬術部長を市川先生より引継ぎ、ちょうど一年となった。よくも悪くも、馬術部には馬術部の伝統があることを感じさせられた一年であった。部長一年生としての感想を、率直に記しておきたい」。

こう書き出し、いくつかの項目を並べたなかに「馬の運動の組み立て、調教の進め方について」記した部分がある。

「調教」については、その平成16年度部報の後半で大先輩の鎌田正人さん(昭和30年卒)が「思いつくまま」と題して一文を寄稿しているので、そのさわりの部分を紹介する。

「昭和28年秋から、翌29年に予定されている第9回北海道国体の貸与馬用馬20頭が、札幌競馬場に繋養され、元橋、荒川の両調教師が赴任されて、多くの場合この両先生の指導を受ける事が出来るようになりました。私の場合は主として荒川先生からの指導でしたが、一年足らずの間に全国から参加される各府県の代表に、そこそこ満足してもらえる馬に仕上げるために人の練習より馬に悪い癖をつけない、口向きをよくする、など調教が主で、人の調練は従といった具合でした。当時はそのことについて少し不満も聞かれましたが、私にはとても貴重な経験になったと思います。そこで現在の部員の方々に考えて欲しいことは、二年生の後半から三年生になった頃からは自分の練習もさる事ながら、馬の調教をする、少しでも乗り易い馬にする、口向きの良い御し易い馬にする事に全神経

を傾けて欲しいと言う事です。その為に最小限必要な要件は、①馬上でバランスが良く取れて居ること、②その結果拳がそこそ自由で動かせ、体の他の部位の動きと独立して使用出来ることが必要になりますし、馬の口に軽く且つ柔らかく当たる事ができるようであれば理想的です。③脚による推進とその操作が（当然拍車も含めてですが）腹帯の直後とやや後方の二箇所、的確に操作できるようになっていれば良いと思っています」

ここまで懇切丁寧に乗り手の「調練」を記し、いよいよウマの調教に筆を進める。

「さてそれでは調教はどのようにすればよいのかを一口で表現するのは大変な事ですが、まずは良い口向きの馬を作ると言う事です。口向きが良いと言うことは、馬がハミを受けて(on the bit) 控えれば止まり、右を控えれば右に回転し、左を控えれば左に回転する、これらの動作がスムーズに行けば問題は無いわけです。然しながら馬には右が固かったり左が固かったり、下顎が固かったりとそれぞれ特有の硬さがあるものです。これらの硬さを調教によって少しでも少なくし、騎手の手綱や脚の操作に少しでも抵抗がなく従ってくれるようにするのが調教と言う事になります」。

これなら調教を「上下関係」とする疑念も消える筈だ。

では、その後新厩舎に移ってきたウマたちは、どのように調教されたかを見ていく。

◎ ■ 北大のウマたち（５）

- ・ 北 遥 号 (イクスカーション) : 平成 10 年に生まれて 16 年 9 月に入厩した。17 年度部報に前野伸策(H17 卒)が調教報告を記す。

「この馬は少しカリカリしやすいが、とても素直な性格をしているので、調教を進めていく際にはその長所を損なうことがないように注意した。(中略) この馬は単独での障害はその障害に集中して向かっていくが、二つ以上の障害になると、向かう前に奥の障害に注意しすぎて手前の障害をあまり見ないような感じがあった。そのためダブルのとき、手前の障害をうまく飛べないので二つ目の障害もうまく飛べず嫌気が差してしまうという感じになってしまう。だからまずは一つ一つをよく見させて、良いリズムとペースで飛越すれば楽に飛べるのだということを馬に刷り込ませなくてはならないと考えた」

ウマの心理を見極めた初期の調教態度だったと思う。

- ・ 北 煌 号 (ウインジーニャス) : 平成 12 年生まれで 16 年 10 月入厩した。競走馬時代は中央で走っていて、グランプリレースで 3 着になったこともある。その際屈腱炎を患う。利根川正明(H18 卒)が 17 年度部報に調教報告を記す。かなり長文なので、障害に関する部分だけ抜き書きする。

「この馬は障害に対してかかっていくところはなく、むしろ障害の前・間・後で失速していく傾向があった。このような馬で障害をやる上で気をつけることは、活気のあるペースで障害の前・間・後を一定のリズムで真直ぐに通過するという事である」。

当たり前のことをたんと書き綴るが、何度も練習してウマにリズムを覚えさせれば調教は成功したと思う。

- ・ 北 椎 号 (シーベスト) : 平成 7 年生まれ、15 年 8 月入厩。日野恵介(H18 卒)の調教報告。

「乗り始めたときのこの馬の大きな特徴としては、非常に前にかかる馬であるということだった。競馬上がりの馬のように押さえが利かず走り出すというものではないが、ハミに対して非常に重ってくる。そのためか、障害の踏切が合わないことも多く、その上潔癖な性格の持ち主で、障害に肢を

当てたがらないために、どんなに低いクロス障害でも、ぎこちなく、そして必要以上に大きく跳ぶことが多かった。そのため、飛越中にハミを引っ張ってしまうのもままあったし、下級生の練習を行う時も、上手くいかない時は鹿っ飛びを繰り返し、かえって下級生に障害への恐怖心を与えたり、馬にとってもマイナスになってしまったりすることがしばしばあった」。

やはり、癖の多いウマだったのだろう。

- ・ 北 閃 号 (パワフルショット) : 平成 9 年生まれで 15 年 11 月入厩。一色真明(H19 卒)が調教報告を記す。調教を担当した頃のこのウマの評価は「潜在能力は高いと思われるが、乗り手を選ぶ難しい新馬であった」。案の定「難馬」だった。

「運動中に少しでも油断しようものなら、簡単に出口方向に肩を張って逃げていってしまう。下級生が乗った時はさらにひどく、曲がることすら難しい時もあった。なによりまず、この状況を直さなければ何も始まらないと思った。まずはきちんと輪乗りをすることだけを考えた。横木などで馬場を 20～30 メートルほど正方形に区切り、その中で常歩、速歩で輪乗りを続けた。徐々に反抗が少なくなると巻乗りや前肢旋回を頻繁に組み込んで行った」。

この調教方法も基本的に正しい。難馬に苦勞する。

× × × ×

後半の写真(編集 掲載省略)に、北遥号 (イクスカーション)、北煌号 (ウインジーニャス) と 北閃号 (パワフルショット)、北柊号 (サクラロイヤル) の入厩時と一年後の写真をダブって載せた。ウマがどう変わっているか、参考になると思う。

後半の写真に 北奏号 (ビバホリディ) が二枚載っているのはダブリではなく、平成 17 年に入厩したときのそれぞれの写真である。これには悲しいワケがある。北奏号 の入厩報告では「普段はとても落ち着いており、障害の飛越センスの高さが感じられる。今後の活躍が非常に期待される」としている。其の翌年、このウマは馬繋台で暴れ転倒。その際、腱を負傷し、競技馬としてのメドが立たなくなったことから離厩させることになったという。離厩報告に宮本亮(H21 卒)が記す。

「このようなことになってしまったのは、①言うことを聞かない馬に対して人が過度に求めすぎないこと、②転倒した際には馬繋台につながれた馬を曳き手がすぐに外せなかったこと、が原因にあります」。

と学生らしい分析をし、二度と同じようなことを起こさない様対策を考えている。そして離厩させた北奏号の代わりに入厩したのが、「奏」の字を「創」にした北創号だった。

× × × ×

- ・ 北 創 号 (サクラスペリオール) : 調教報告で一色真明(H19 卒)が馬名のいわれから記す。

「この馬は平成 18 年 6 月に静内の新和牧場より入厩した。非常に潜在能力の高さを感じさせる馬だった。当時、事故により将来を期待された北奏を離厩させた直後だった。北奏の事故を忘れないようにそして北奏の分まで活躍して欲しいという願いを込めて『北創』の名前をつけた。また、近年の主力馬の高齢化や目立った“純”北大調教馬が出てきていない状況を打開し、次世代の北大を創りあげて欲しいという思いを込めて名付けた」。

潜在能力が高いといっても、乗馬としてはゼロからのスタート。ではどう調教したのか。

「歩様の大きい馬なので、調教に当たってはその動きを小さく丸め込んでしまわないことを注意し、馬と扶助との関係を一からゆっくり作っていった」。

最初の調教手段が良かったのかウマは次第に成長、障害も順次レベルアップしている。

- ・ **北 柊 号 (サクラロイヤル)** : このウマは北創号のサクラスペリオールと共に新和牧場より入厩した。入厩した時から、「素直でおとなしく扱い易い乗馬」とされていた。谷山直美(H20 卒)が調教報告を記す。

「素直ゆえにとっても頑固でもあり、嫌なことは頑としてしない感じだった。人がかなり強く出て行かないと従わない。調教する上で、新馬などは特にわがままを覚えさせないためにも、馬に負けない強さが必要だと思う。私にはそのような『強さ』が不十分であった」。

谷山は女子部員だと思うが、素直に力不足を認めている。しかし、調教は力ではない。

- ・ **ネイチャーヒーラー 号** : 平成 10 年生まれで 18 年 9 月に入厩している。山川倫明(H21 卒)が入厩報告を記す。

「二年生の秋の時点でこのウマの担当チーフとなり、しかも、それが 2 頭目の担当馬だったというのは、技量・経験の両面から考えて荷が重かった。北大に入厩するまでの一年程すでに乗馬として調教されていたとはいえ、脚の扶助に対する理解などは乏しく、新馬であるという印象は拭えなかった。それ以外にも、様々な問題を抱えていた。元々カリカリした性格で、落ち着いて運動できないことや、手綱を強く握ると、巻き込んでくるといったことだ。人が自信を持って対処していけば問題はなかったのかもしれないが、何から手を付ければよいかわからず、周りの声に惑わされてばかりだった」。

報告はまだまだ続くが、要は入厩馬が多すぎ「調教まで手が回らない」といったところか。

- ・ **北 煌 号 (ウインジーニャス)** : 平成 12 年生まれで 16 年 10 月の入厩。ホヤホヤの新馬で入って来た。19 年度部報に谷口善彦(H21 卒)が調教報告を記す。

「先輩と代替わりの時点である程度この馬の癖や性格を知った上で一年をスタートすることができた。当時の印象は、とにかく頑固だった。それは一年経った今でも同じである。良くも悪くも自分に素直で、納得したことに関してはこちらの要求以上のことを器用にこなすのだが、一度ヘソを曲げたり、気に入らないことがあると乗り手の指示から逃れることばかり考えるようになる。個人的な見解になるが、運動神経も理解力も高いレベルにあり、その気になればある程度のことは難なくこなせるはずである。しかしなかなかやる気にならず、かと言ってやらされるのはもっと嫌がる。乗っている側としては非常に歯がゆい馬だ」。

読んでいて何度も「勿体無い」という気にさせられた。

× × × ×

この号では、平成 18 年の 5 月、7 月、9 月に相次いで亡くなられた第六代半澤部長、岡田監督、第八代小池部長の追悼写真を掲げた。

その前に昭和 38 年の八木主将が平成 17 年、交通事故で亡くなっている。お悔やみ申し上げる。

半澤、岡田先輩らは、筆者(生田)が現役時代も卒業後も大変お世話になったし、馬術部を今日の繁栄に導いたのもすべてお三方のおかげであった。八木主将は筆者の卒業年次の入学で共に馬術部の今日の基礎を築いたものと考えている。惜しい人たちを亡くしたものだ。

新しい馬運車の写真は、平成 16 年 5 月、後援会資金などで購入したもの。

§ (その十二) オンタイとベル号

◎ 鎌田正人さん追悼

平成 20 年度部報第 54 号に「鎌田さん追悼特集」を掲載している。

北大馬術部にとって掛け替えのない偉大な先輩であり、日本の馬術界にとっても優れた指導者であった。急逝された鎌田さんこと「オンタイ」を偲び、部報の追悼特集に従ってその足跡を追う。

・岡本 洸（昭和 31 年度卒）追悼言

岡本さんは筆者（生田）が入部したとき（昭和 30 年）の最上級生、鎌田さん（当時は榊原姓）の一年後輩にあたる。「三途の川」を水濠に見立て、早い渡り過ぎを「経路違反」と表す。

「どうして水濠をもう渡って行ってしまったんですか。あまりに突然の訃報を聞いた時、率直にそう思った。既に半世紀以上たった昔の部員時代を思い出すと、鎌田先輩（当時は榊原先輩）との出会いは昭和 27 年春のこと、我々新入部員の朝練習場は札幌競馬場の空き地だったように思う。当時、進駐軍米兵がたまに来て乗る乗馬のアート、チャンプ、ブラッキーなどに競馬場の好意で部員も乗せてもらっていたからである」。筆者にも懐かしい馬名だ。

翌年に、29 年国体の貸与馬用の乗馬が数十頭入厩して基礎調教が始まると、榊原先輩の存在感は抜群。ウマヤの親分みたいだった」。

通称オンタイ、若い姿を彷彿とさせる。

「馬の健康管理には厳しい目で見ていた。後年、自馬の全日本学生選手権が東京・馬事公苑で行われたとき、小生は「北斗」で総合種目に出してもらった。簡単な馬場の審査のあとの野外騎乗では何と一番の出走。コース、自然障害物とも初めての経験だった。頭の中はカーッとしたまま歩度の配分などは上の空。失点ナシで快調にゴールした。北斗は道営競馬あがり（金花）だから当たり前か。しかしオンタイからはガッツリ怒られた。『早すぎだ。脚の手入れをしっかりとっておけ。腫れて大変だぞ』。翌日、エビハラ（腱鞘炎）にはならなかったが余力審査の中障害はメロメロ。やっと入賞の程度。初めて見るウマでもオンタイは体型、ツメの状態などで乗り具合をよく言い当てた」。

・千田哲生（昭和 31 年度卒）追悼言

「鎌田（旧姓榊原）正人さんは私達の一期先輩で、戦後馬術部を復活させた大先輩が揃って卒業後、馬術部を引き受け大活躍された」。ここに言う大先輩の中には、古谷製菓の後の古谷昌司社長や後の斎藤善一郎長、釧路のタンチョウズルを育てた渡植貞一郎さんらもいた。

鎌田さんは、旧庄内藩の名家の出で、豪放磊落、酒と囲碁に強く、小さいことに拘らぬ方で、みんなからオンタイと呼ばれて親しまれていた。彼が馬術の技術に長け、北大のみならず、北海道馬術界をリードしたこと、浦河町議員として、軽種馬協会役員として、活躍されたことなどは多くの人たちが記載するだろうからくどくど述べない」

ここまでは筆者も承知していたが、この先が面白い。年次の近い人が話していた事か。

「小さい頃からウマに親しんでいたとかで、裸馬が得意であった。なにしろ、裸馬に乗って走ったらオンタイの騎座がむけず、ウマの背中中の皮膚がむけたという伝説がある。」

体格のいい人だったから、伝説などではなく、本当の出来事であつたろう。

「昭和 29 年の札幌国体が終わって、道が国体で使った馬匹を払い下げることになり、わが北大馬術部も自馬を持てるチャンスがやってきた。当時のキャプテンは鎌田さんであつた。部としては 4 頭欲しいと考え、鎌田さんが先輩方に相談すると『1 頭削られることを念頭に 5 頭と申請しろ』と入れ知恵された。当時の部長松本久喜先生に相談したところ、『5 頭欲しいのなら』と 1 頭水増しして 6 頭を大学当局に申請。驚いたことに当時の杉野目晴貞学長はこれをまるまる認め、「6 頭の自馬」を持つ身となった。厩舎と馬場はポプラ並木そばの第一農場の一画と決まった」。

杉野目学長は若い頃に乗馬を楽しんだ経験があるとかで、ときたま馬場に来てウマに乗ったと千田さんの思い出話にある。鎌田さん率いる初期馬術部にふさわしい話である。

× × × ×

この後に、昭和 34 年卒の筆者の「オンタイとベル」と題する哀悼文を載せた。ほんの一部をこのシリーズの「その(3) ウマの血統と能力」で記しただけなので、あらためて残りの部分をここに紹介する。

・生田勝一(昭和 34 年度卒) 追悼言 「

(前略) 札幌競馬場に、セントエイジという美しい栗毛の牝馬がいた。気の優しいウマで新入生が乗ってもうまく導いてくれた。もう 1 頭、去勢に失敗してカタキンの、荒々しい青毛のレンザンという牡馬がいた。どうやら牝馬が発情しているときに、レンザンが馬柵棒を外して求婚したらしく、セントエイジが身ごもった。それから一年、競馬場で元気な男の子が生まれた。セントベルと名付けた。(中略) この子が明け二歳になって、乗り運動を始めることになった。その役目が筆者に回ってきた。(その頃筆者はある事情があつて競馬場の厩舎に間借りしていた。板壁を隔てて隣の馬房にセントベルがいた。いわば隣同士だった。最初の乗り運動のことは「馬の血統と能力」に記したので省く)

オンタイはその頃からベルに目をつけていたらしい。途中の経過はとぼすが、そのうちにオンタイがベルを本格的に調教して、障害馬・総合馬に育て、全国大会にも出場させた」。

やがてオンタイはベルを浦河町の鎌田牧場に引き取り、優秀な競技馬としたのだった。ちなみにオンタイがムコに入った鎌田牧場は、昭和 34 年の日本ダービー優勝馬コダマを送り出した名誉ある牧場であつた。

× × × ×

東京・メキシコ五輪に出場した筆者と同期の千葉幹夫が、この後に「鎌田さん追悼」文を書いている。千葉はオンタイの教えを一番密接に受けた。オンタイの愛弟子であつた。

・千葉幹夫(昭和 34 年度卒) 追悼文

「(前略) 入部して最初の頃、毎日馬術部へ来るのではないのに、どんな馬に乗っても、馬の背にくっついて乗っていて、思い通りに動かしてしまう先輩が居て、全員がこの人を『御大』と呼んで一目置く存在であることを知りました。

やがて、御大が結婚して奥さんと一緒に近所に住んで、獣医学部へ学士入学したので、私は常時後をついて歩いて馬の話を聞きながら晩ご飯をご馳走になったものでした。

それから『馬学綜説』の田垣住雄さんのお宅に連れて行ってもらい、馬についての広範な考え方について話を伺った。馬に乗るということは、騎手のやるべき事は何であるか、を考えさせられた基本的根幹は、

こうして形成されたものと思っています。(略) 私は卒業して間もなく中山競馬場の競走馬診療所勤務となり、その頃御大はよく北海道から東京へ出て来られたので、お目にかかるとう馬の話をしたことが今は懐かしい思い出です。

間もなく東京オリンピックの候補生となり、東北牧場で合宿訓練することになり、騎兵学校当時の最高教官たちが一日中、傍について最高の騎兵教習を実施してくれました。京都の荒木雄豪さんも居たので、時々御大も来てくれて、大いに馬術論議をした事が思い出されます」。

千葉はこのあと渡仏してさらに技に磨きをかける。

× × × ×

次の樋口さんは筆者の一年先輩の主将だが、一年留年して同じ卒業年次になった。

・樋口正明（昭和 34 年度卒） 追悼文

「鎌田（旧姓榊原）さんがキャプテンのとき、私は一年生部員として馬術部の一員に加わった。部内ではいつもオンタイと呼ばれていた。(略) オンタイが獣医学部に学士入学をして、再び馬術部の活動に参加された時、私は三代あとのキャプテンになった。部内では私が先輩の立場だったが、ウマの調教等については、適切なアドバイスを受けた。更にこのあと私が留年して昭和 34 年一緒に卒業したので、オンタイと私の関係は先輩・同輩・後輩という、珍しい関係を持っていた。

昭和 31 年、兵庫国体が宝塚競馬場で開催され、オンタイと共に参加し、西日本馬術大会にも出場することになった。当時の馬輸送は、国鉄の貨物で行われていたのだが、海が荒れて青函連絡船が止まってしまい、貨車の到着が大幅に遅れて宝塚に着いたときは、フラつく馬が出ていた。余裕のある日程で出発したのだが、馬のコンディションが整わないうちに、競技が始まってしまった。このような悪条件の中でも、オンタイは馬の能力をできる限り引き出すことに取り組み、入賞を果たす実績を挙げられている」。

・大場善明（昭和 37 年度卒） 追悼文

「この鎌田正人さんの写真（編集 写真略）は、私の憧れでした。私のアルバムには、「昭和 33 年 6 月、『第 7 回東北北海道地区学生馬術大会』（於岩手大学）」での鎌田正人先輩」と書き込まれています。現在では「北日本学生馬術大会」に相当します。

私たちが入学した昭和 30 年代には各大学の自馬も少なく、障害競技は『チーム 5 名』による「貸与馬大学対抗戦」の形式が殆どでした。(中略) このとき鎌田さんが騎乗された貸与馬は当然初対面で、一見、「南部馬」風の風貌に、私にはそれほど飛越能力のある馬には見えませんでした。鎌田さんが一つ一つ馬に話しかける様子で、いたわり元気づけながら注意深く障害に向かう思いやり、私は心打たれたものです。馬も決して余裕のある跳躍には見えませんが、慎重に鼻面を障害に近づけ吟味しながら、鎌田さんの指示に集中して様子が伺えます。健気に一所懸命飛越しようとする馬の表情に感動しました。私のお気に入りの写真です。」

おくやみ文の最後に、先に筆者の書いた「オンタイとベル」の後日譚とも思える追悼文が恩田正臣にあるので紹介する。

・恩田正臣（昭和 39 年度卒）追悼文

「鎌田先輩は、私が入学した昭和 34 年にはすでに卒業されて、浦河の競走馬生産の鎌田牧場におられました。正確には知りませんが、昭和 30 年に農学部畜産学科をご卒業された後、榊原姓から鎌田姓になられ、獣医学部に学士入学、卒業されたと聞いています。

私が一、二年生の頃は、競技会の時に審判員でお顔を拝見する程度で、先輩たちが「オンタイ」と尊称する特別偉大な人だと思っていましたので、こちらから話しかけることなどとてもできない存在でした。

私が 4 年生の時に、北大の日高実験牧場から、アラブ種の牝馬を移管してもらいました。小柄ながら潜在能力の高そうな馬でした。北翔と名付けたその馬は、学生部員が調教するには難しいということで、鎌田さんに調教をお願いすることにしました。（略）

その鎌田さんの調教された競技馬にセントベル号がいます。昭和 37, 38 年頃の道大会では、帯広畜産大の竹若号やクモキリ号などを相手にして覇権を争う馬になりました。このセントベル号で、東京オリンピックを視野に入れていたのかも知れません。

昭和 38 年の秋に、プレオリンピックを謳って国際大会が東京の馬事公苑で開催されました。この大会に出場するため、セントベル号を送り出した後に鎌田さんに事情が生じて出場できなくなりました。そして、急遽私に代役で出場するように依頼を受けました。私がある時学生の大会で東京にいたからだと思います。セントベル号には、札幌で一、二度乗せてもらったことがあり、乗りやすい馬だと思っていたので、喜んで引き受けました。

130 ㌔くらいのコースだったと思いますが、一反抗（学生は減点 3）のみでゴールし、日本選手の中では上位に入り、次週にアバロン乗馬学校で行われる国際親善大会の「日本 B チーム」のメンバーに選出されました。「日本 A チーム」は東京オリンピックの候補選手です。チームは「3 名」で、「B チーム」は私と西村修一さんともう一人でした。ここでもセントベル号は一落下（減点 4）でゴールし、「日本 B チーム」が A チームを破り、ニュージーランドに次いで「2 位」になる快挙を成し遂げました」。

× × × ×

この話は追悼文を部報で読むまで筆者は知らなかった。セントベル号を初めて乗馬訓練したのは前にも記したように私筆者である。そのあと鎌田さんが引き取り、調教し直したにせよ、セントベル号が東京五輪の候補馬になっていたとは、ウマの初調教でこれ程の名誉はない。

× × × ×

最後に、鎌田さんが後輩の部員たちへ残した愛情ある教えが昭和 51 年度「部報No.22」に記されている。

「事故馬の報告に接しました。一か月あまり、看病は大変ご苦労と思いますが予後を見通して思い切って処分することも一面で愛馬心の発露と考えます。今後の教訓として充分検討されますよう希望します。」（鎌田正人）

（編集：昭和 51 年度「部報No.22」に掲載。放馬による北隼号事故(S51/12/20)について鎌田正人さんからの所感寄稿文）

§ (その十三・終) 万葉へのウマ物語

◎北大のウマたち (6)

平成 18 年以降に入厩・離厩したウマも数多い。入厩したのは、写真で見る限り素晴らしい馬体のウマばかり。いずれもサラブレッド種。昔々、大学農場の農耕馬を調教して乗っていた身にとって、それこそ垂涎の的である。そのウマたちを紹介する。

- ・ 北 凜 号 (ネイチャーヒーラー) : 平成 10 年のアメリカ産、18 年 9 月に入厩している。21 年度部報に野村基惟(H22 卒)が調教方針を記しているが、翌 22 年度にこの馬名はない。どうしたところか。
野村が調教したのは入厩 3 年目という。「大まかな調教方針としては前年と同じく、コンビネーションを中心として積極的に障害飛越に取り組んだ。(中略) その素直な気性から野外の障害にも臆することなく取り組み、多くの障害はクリアすることができた。最終的には北日本学生の総合競技にも出場したが、耐久審査(野外走行)で乗り手の経験不足をまろに露呈し走り過ぎてしまい、馬の能力を上手く引き出してあげることができずに、失権という形に終わった。人としては大変悔いの残るものとなったが、乗り手に実力と経験があれば、耐久審査の完走はもちろん、全日本学生への権利獲得も十分可能であるように感じた」。
- ・ 北 兎 号 (サクラフォルツア) : 平成 16 年生まれで 18 年 11 月入厩、明け 3 歳のピッカピカの新馬で北大に来了。
22 年度部報に宮本亮(H21 卒)が 3 年間の調教の成果を記す。成果というより雑感に近い。
「この馬には 3 年間携わってきました。今思うともう少し馬をよくしたかったし、そうすべきであったと感じています。卒部してからは、現役のわがままを聞きながら、そして時にどこからともなく飛んでくる横槍をかわしながら、しかしできるだけ馬に負担をかけすぎずに、馬の心に余裕を残しながら、調教を進めてきました。今はまだもの足りないところがありますが、この馬はきっと大丈夫でしょう。確かな道標を与えてやりながら、一段飛ばしではなく、一段一段焦らずに一緒に昇っていったと思います。時には期待以上の成長を見せてくれることでしょう」。
- ・ 北 焔 号 (ファイアーマリオ) : 平成 6 年生まれで 21 年 10 月入厩している。22 年度部報に平芳悠人(H26 卒)・出戸裕人(H23 卒)が連名で記す。連名での報告は珍しい。内容也大いに変わっている。これが「現代風」か。
「今の北大において最も調教が進んでいる馬。平地なら低伸運動からハーフパス、反対駈歩、踏歩変換を流れではなく一步一步のリズムの中でできる。
バランスも刻む駈歩ができるくらいまで育っている。
拳の握りだけで十分効くほど口が柔らかい。物見も少なくホットな処があるため、自分から向かって飛んでいく前進氣勢にあふれるスーパーホースである。ただ、足元が弱く、5 月の大会後から 7 月半ばまで跛行のためほとんど運動できなかった。7 月途中から、一年目の平芳に乗り換わった」。
- ・ 北 葉 号 (ログキャビン) : 平成 8 年のアメリカ産、21 年 9 月入厩している。22 年部報に山本栄輔(H23 卒)が記す。

「まずはログの自己（他己）紹介。経歴は帯広畜産大（6年）からノーザン（1か月）、そして北大。長所は50戦ノーパンクの肢、疲れ知らずのスタミナ、意外とまじめ。短所は飽きやすい、すぐさぼる。嫌いなものはスプレー、ビニール、体温計、リンゴ、他の馬。

北大名の由来について。畜大時代に『柏華』という名前であったことから、畜大で咲いた華に北大で実（菓）をつけようと思い、北菓という名前をつけた。決して全日学総合優勝馬をパクったわけでも、北菓樓の宣伝でもない」。いずれにせよ優秀なウマである。

× × ×

次は「入厩報告」。今のところこのウマが一番新しい。

- ・ **チェリーアドミラル 号** :平成5年生まれで、かなり高齢になった22年8月に入厩した。柳田睦仁(H25卒)が記す。

「チェリーアドミラル号はマオイホースパークから入厩しました。17歳の騙馬です。おっとりしたおとなしい性格をしています。畜大卒の武笠さんによって調教された馬で、障害飛越能力はすばらしいものを持っており、道大会では120㌔クラスを完走しているので来年の北日学では期待できると思います」。

果たしてどうだったか、大会は終わっている。

次いで「離厩報告」に移る。平成20年度部報に2頭の離厩を告げている。

「北閃（パワフルショット）」について出戸裕人（H23卒）が記す。

「この馬は、乗馬としての調教は非常に進んでおり、この一年で人に多くのことを教えてくれました」。

色々やってみたがうまく乗りこなせない。結局、持て余した、というところ。

「北遥（イクスカーション）」について小島真宏(H21卒)が記す。

「平成20年の10月、北遥号はメインフィールドに離厩しました。理由は骨瘤により練習馬として満足な運動が出来なくなったことです」。

これも可哀想なことをした。いずれにせよウマを大事に扱っていないのではないか。

× × ×

20年度部報に、春田恭彦（昭和47年卒）日本馬術連盟常務理事が「北京オリンピック in 香港」と題して見聞録を書いているので、ごく一部を抜粋する。

春田理事は、中央競馬会を退職後、馬術連盟の仕事をし、北京五輪では馬術競技の日本選手団の役員として参加した。

決勝の日には1万8,000席が満席になったと記す。馬場馬術の日本代表法華津選手は67歳。北京五輪のすべての出場選手の最年長だった。障害馬術競技には日本から杉谷選手ともう一人が参加したが、高さ160㌔、水濠幅420㌔の難障害を予選第一走行をノーミスでクリアしたが、日本選手では杉谷選手だけ決勝ラウンドに進んだ。しかし健闘あえなく29位で終わったという。

◎ 万葉のウマたち

ここから最終章の表題にした「万葉のウマ物語」に移る。

「馬と詩歌について 万葉集を主軸に近世まで」と題した、基になる論文は、昭和 40 年卒の横田肇が「北大馬術部七十五年史」原稿として寄稿されたものだが、『七十五年史』がなかなか上梓されないので平成 21 年度部報に同論文を掲載した」と、断り書きにある。

同氏論文執筆の日付は（2004 年 2 月 2 日）とある。「年史」にはいささか程遠い。（編集注：「北大馬術部 75 年史」の発行は 2009 年 10 月 24 日。）それにしても立派な研究論文である。

横田肇氏の同論文は 10 の項目から成る。「1. 万葉の馬」に続いて、「2. 鐙について」「3. 騎馬民族征服説の矛盾」「4. 馬酔木について」「5. 『駒』という表現」「6. 吉田兼好と馬」「7. 江戸時代（馬歌）」「8. 馬子唄」「9. 新渡戸稲造と馬」「10. 森鷗外、夏目漱石、正岡子規と馬」と、どの項を取ってもウマ好きには興味あるものばかり。馬術部の出身者に似つかわしい研究論文だと思う。

中でも最初の「万葉の馬」は、よくぞこれだけ拾い出したものと驚く。全部で 90 首。

万葉集の歌は 1 番から 4516 番まで番号が付けられており、その 90 首の番号を論文の最後に「註」として書き出している。

× × ×

巻 1— 4 に、舒明天皇を歌った有名な一首がある。

「たまきはる 宇智の大野に 馬並（な）めて 朝踏ますらむ その草深野」

奈良南部の五条市宇智。その南西部一帯の山野が宇智野、宇智の大野といわれる地域であった。草深い宇智の荒野に、いましも狩に出立しようとする馬上の凛々しい大君（舒明天皇）の雄姿が目につかぶ。臣下の「間人連老（はしひとのむらじおゆ）」が歌った歌である。

なんと雄大な、そして勇壮な狩りの歌か。「馬並めて」という視覚的な表現がいいし、「朝踏ますらむ その草深野」という止め句が、荒野へ駆け出す大君の雄姿を見せる。

× × ×

ウマは当時の重要な交通手段であった。つぎの 2 首は馬に乗って通ってくる恋人を待つ歌。

「味酒（うまさけ）の 三諸（みもろ）の山に 立つ月の 見が欲し君が 馬の音ぞする」

巻 11—2512 人麻呂歌集。

三諸の山は今の三輪山一帯。味酒はその三諸の山にかかる枕言葉。「三諸の山に出る月が見たいように、会いたいあなたの馬の足音がする」。恋しく切ない気持ちを馬の足音に託す。

「馬の音の とどともすれば 松陰に 出でてぞ見つる けだし君かと」

巻 11—2653、詠み人知らず。

論文執筆者はミューラーの詩にシューベルトが曲をつけた「冬の旅」24 曲の中の 23 番目「郵便馬車」を引き合いに出し、「馬の蹄の音に、恋人からの手紙を空想して胸が高鳴る」ことをこの歌に結びつける。しかも——

「この曲のテンポはかなり速く、馬の速度は『はやあし』よりも『かけあし』に近い印象を受ける。

これも馬だから詩になるのであり、歌になるのだ」と解説する。

万葉集の歌の解説をこんなふうにもってきたのは、おそらく初めてだろう。

女たちからの想いだけでなく、馬で通う男たちも恋の歌を残す。次の2首がそれ。

「遠くありて 雲居に見ゆる 妹(いも)が家に 早く至らむ 歩め黒駒」巻7-1271 人麻呂歌集。
訳すまでもないが「雲のかかっている彼方にある恋人のもとに、早く行きたい。馬よ急いでおくれ」の意味。青毛のウマに乗って逸る気持ちが伝わって来る。ウマに乗ったことのある者だけが知る気持ちかも知れない。この歌は「歩め」と言っているが、もっと気が急いて、一目散に馬を走らせているような歌がある。

「いで我が駒 早く行きこそ 真打山(まっちやま) 待つらむ妹を 行きてはや見む」

巻12-3154 詠み人知らず。

真打山は大和と紀伊の境にある標高121^尺のゆるやかな峠。

「さあ、我が駒よ、早く駆けておくれ。真打山という名のように待っているであろう妻を、行って早く見よう」。これもおおらかな恋の歌である。

× × ×

催馬楽(さいばら)は平安時代、宮廷貴族たちの間で盛んに愛唱された。論文の筆者によると、奈良時代の民謡を平安時代に至って雅楽の管弦の影響によって歌曲としたものという。

その代表曲が「我が駒」で、万葉集の次の歌を基にしている。まず催馬楽から。

「いで我が駒 早く行きこそ 待乳山(まっちやま) あはれ待乳山 はれ待乳山 待つらむ人を 行きて はやあはれ 行きてはや見む」

次に万葉集の基になった歌。

「妹(いも)がりと 馬に鞍置きて 生駒山 うち越え来れば 黄葉(もみち) 散りつつ」

大和と河内を分ける生駒山脈の主峰生駒山(642^尺)を馬で越える。「妻のところに行こう」と馬に鞍をつけて、山を越えて来ると紅葉が散っている。紅葉を愛でる余裕もある。

仔馬を恋人になぞらえて歌った歌もある。

「柵(くへ)越しに 麦食(は)む仔馬の はつはつに 相見し児(こ)らし あやに愛しも」

柵を隔てて麦を食う仔馬。首を伸ばしても少しずつ(はつはつに)しか食べられない。それを見ているうちに、ほんのわずかしかなったことのない恋人を思う。男の飽き足らないがゆえに恋しくてならない気持ち。ウマを可愛がっても歯がゆく、飽き足らない気持ちが伝わる。

× × ×

第2項の「**鑑について**」は、足踏が転化して「あぶみ」になったとし、「鑑は騎馬民族の発明ではなく農耕民族の発明だった」と異説を唱える。

次の「騎馬民族征服説の矛盾」も、記紀、万葉集を例にとって「我々はとことん稲作民族であって、記紀・万葉の時代からその価値観・発想法・習俗において遊牧民族的なものはほとんどない」と断定する。

最後に、一首の中に馬と牛を詠みこんだ正岡子規の大まじめな歌。

「馬の尾に つきて走りし 蠅もあらむ とりのこされし 牛の尾の蠅」

夏目漱石にも一句ある。

「馬の蠅 牛の蠅来る 宿屋かな」

「ウマ」物語 了 (生田勝一)

< 「ウマ物語」 編集後記 >

— 「部報」の記録 と 愛馬たちの記憶 —

令和 2 年(2020 年)12 月 10 日、昭和 33 年度馬術部主将を務められた「生田勝一さん」が逝去されました。83 歳でした。お世話になりました。ご冥福をお祈りいたします。

生田勝一さんは旭川のご出身で昭和 30 年 4 月北大に入学、恵迪寮「馬術部」に迎えられました。当時の馬術部を支援された教授陣や、先輩諸兄の熱烈なご努力により昭和 29 年北海道国体「六頭のウマたち」の自馬も加わり、画期的な活動が復活された年でした。生田さんご自身も、その熱意と高い指導力により昭和 33 年度の主将を務め、北大馬術部黄金期に活躍されました。昭和 34 年 3 月経済学部をご卒業後も後輩や愛馬たちへ積極的なご支援が続きました。

平成 24 年(2012 年)5 月頃でしたか、そんな生田さんから大場の元に『ウマ物語』の資料が届きました。毎号の「部報」を丹念に読まれ、調教の理念とその成果について率直な意見が述べられています。「部報」をこれまで詳細に点検されておられたとは知りませんでした。すでにこの生田さんの『ウマ物語』をお読みになられた方もいらっしゃるかも知れませんが、資料が散逸せぬようにまとめてみました。ご一読お薦めいたします。 (大場善明記)